

GRANBLUE SOULS

Par

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火が陰る時、その世界は淀み出す

その淀みは、何時しか一人の灰に空の世界を見せた

しかしそれは救いでは無く、淀んだ世界が見せた幻想に似た希望でしかない

陰り出した火は、ただ憶えていて欲しかっただけなのだ

火と、一人の灰を、空の少年達に

グランブルーファンタジーとダークソウル3のクロスオーバーです。

有りそうで無かったので、思い付きで書きました。

※ 諸注意 ※

・ グランブルーファンタジーはアニメ版準拠としております。
・ ダークソウル側の主役は灰の人ですが、殆どオリジナルの人物ですのでオリ主の様な存在です。

・ ダークソウル側の設定は、フロム脳を全開にしています。

・ 二次創作独自の解釈と設定になる事があります。

以上の要素が苦手な方はご注意ください。

目次

色の無い霧	1
BONFIRE LIT	21
迷い人達	55
阻む高壁	87

色の無い霧

■ ■
一 ルリアノート【火継ぎ】

蒼穹を飛ぶ一隻の船。飛竜を思わせる騎空艇【グランサイファー】。

夢、幻、伝説と言われる【星の島】を目指す少年、その仲間達を乗せ悠々と空を行く。その船の甲板でピンク色のノートを読む一人の少女がいた。

思い出の詰まったノート、旅の記録を綴った宝物。

「ルリア、何見てるの?」

「あ、グラン」

そんな彼女、青色の少女ルリアに声をかけたのは一人の少年グランであった。

「あ、日記か」

「はい、ちよつと今までの思い出を」

「へえ、どこの島の事読んでたの?」

「……火継ぎの島の事を」

火継ぎの島。そうルリアが言うところ、グランは悲しそうな表情になる。悲痛なものではないが、しかし彼が思い出す記憶の中に辛く苦いものがある事は確かだった。

だが同時にその記憶を懐かしみ、大切にしている事がうかがえる。

そのまま彼はルリアの横へと座った。

「こーやって思い出さないと、駄目だと思って……」

「……うん」

「私達が覚えている事が、きつと大切な事だと思っんです」

「うん、僕もそう思うよ……忘れられない」

二人が思い出すのは、最早この空には存在しない島。

「淀み」が生み出した交わり。火と空の邂逅。

ただ過酷な宿命を背負う人間達の物語。

二人はそれを忘れない。そして思い出す。

永久に続いた火継ぎ、その終焉の物語を。

二 火継ぎの島

それは数か月前の事だった。

グランが空の世界へと相棒の子竜ビィと旅立ち、ルリアと女騎士カタリナと風が繁栄をもたらす島ポート・ブリーズへと辿り着き、操舵士ラカムと騎空艇グランサイファーを仲間とし、その後も魔法使いの少女イオ、ベテランの騎空士オイゲン、謎の女性ロゼツタなどの頼もしい仲間を増やしていた。

そして騎空団として旅を続ける中、彼らは不思議な噂を聞いた。それは「巨大な島が突然現れ、そして消えた」と言うものだった。

空に大地が浮き、島として存在するこの空の世界。そこで新たな島が誕生する事は稀である。しかもそれが突然予兆も無く現れては消えるとあれば尚更異常であった。

そしてその噂も確証はない。ただ何人かの騎空士が言うのだ。「島が無いはずの場所、そこに突然現れた色の無い霧の先、そこに巨大な島を見た」と。

しかもその島の全景は霧で見えない。そしてシルエットに關しても目撃情報はバラバラ。巨大な城、天を衝く山岳、凍てついた都……。この噂は少しずつ騎空士の間で広まるが、誰もその島に辿り着いた者はおらず、バラバラの目撃情報もあつて眉唾の域を出ない。

だがただ一つ、その島を見た者達に共通したのは「酷く空が淀んだ気配がした」と言う事だった。

この噂をグラン達も耳にしたが、彼らもまた噂話程度に考えていた。

だがあるいは、その島があるとしたら空に存在する、神とも言われる事すらある超常の存在星晶獣が関係しているのではないか。そう考える事もあった。

そしてその噂を聞いてからまたしばらく経った時、彼らは目にする事になる。

「なんだ、あれは……」

カタリナが甲板から唾然として呟いた。

グランも、ルリア、ビー達も驚いて目を見開く。そしてグランが呟く。

「色の無い、霧……!」

それは突然だった。普段と同じように、グランサイファアを飛ばしている時、突如としてそれは現れた。

グランサイファアの進行を塞ぐようにして、大規模なその色の無い霧が。その中に浮かぶ巨大な島が。

「あれが噂の神出鬼没の島って奴かよ!」

ラカムが急ぎ舵を切った。このままでは霧の中へと入る事に成る。島の姿は霧で殆ど見えていない、だがおぼろげなシルエツトからも明らかにグランサイファアが飛んでいる高度に建物か何かがあるのが見えた。とにかく避けねばならなかった。

「きゃああつ!」

「イオちゃん、こっつちに!」

「かわせるカラカムっ!？」

「やらねえと最悪死ぬだけだ! お前等何かにつかまってる!!」

急に方向を変えるグランサイファー、その反動でイオが甲板を転がるが、ロゼツタが不思議な力で生み出した蔓で彼女を助ける。

オイゲンが叫ぶがラカムも必死だった。

「ルリア、こっちに!」

「は、はい!」

「ひゃあ、あぶねえ!？」

グランがルリアを抱き寄せて柵に捕まる。ベイもグランの服へとしがみついた。

「どうなってる、グランサイファーが引き寄せられるぞ!？」

霧が迫る中、スピードを落としたはずのグランサイファーは勢いをそのままに霧へと向かっていった。

何か不思議な力が働いている事は間違いない、こうなると操舵士の技術でどうにかするものでは無かった。

「ちくしように、駄目だ! 全員衝撃に備えろ!」

「ぶ、ぶつかるとして事ッ!？」

「そうならねえように祈ってる!」

そしてなすすべも無くグランサイファーは霧へと飲まれた。

霧の中は風が吹き荒れ、何も見えなかった。グラン達はただ船から落ちないようにする他なかった。

だがそんな時、ルリアはある音を聞いた。

遠くから響く、何かを呼ぶようなその音を。

「鐘の、音が……」

最後に霧の抜け見えた混沌とした島の姿、それを見て直ぐ彼女の、彼女達の意識はそこで途絶えた。

■ 三 灰

「——ランツ」

「……う」

「——ンツ！ ——！」

「……ルリ、ア？」

「グランっ！ 気が付いたんですか!？」

薄く開いた瞼、その隙間に太陽の光が強く入る事はなかった。そのかわり、グランに

とっては最も安心できる少女と子竜の姿があった。

「……ルリアっ!? 無事で、つうっ!?」

「グラン、動くなつて!」

「ビィ、ここは……?」

「わからねえ、オイラ達も気が付いたらここに居たんだ」

体を強く打つたらしく、身を起こそうとすると背中が強く傷んだ。ゆつくりとルリアに助けられながら身を起こし、改めてグランは自分のいる場所を見渡した。

酷く陰気な場所だった。山の中だろうか、長方形の岩がゴロゴロと転がり、崖に挟まれ、しかし人工的な建物の名残があった。

おそらくはあの霧の先に見えた島なのであろう。

「なんて、寂しい場所だ……」

「はい、私もさつきから妙な気配を感じて」

「大丈夫、僕がいるから」

ルリアがグランの裾を不安げに握ると、グランはその小さくか弱い手を強く優しく握つてあげた。それだけでルリアの不安は幾分か消えたようにで笑みを浮かべた。

「そう言えば、カタリナさん達は?」

「いや、オイラ達も先に気が付いたんだけど、辺りに居ねえんだ」

「別の場所に落ちたのかもしれませんが……」

狭く暗い場所で目覚めた事と、近くにグランサイファーがない事から自分達は空から落ちたのだろうと予想が付いた。バラバラに落ちたとしたら、初めて訪れた場所で合流するのは困難になるかも知れない。

体はまだ痛むが、なるべくすぐに仲間を探すべきとグランは考えた。だが今はルリアの身の安全を確保したいため、ここではない安全な場所を探す事を優先すべきとも考える。

なんであれここを移動するべきだろう。幸か不幸か、自分たちのいる場所から道は一本道、どのみち進むほかなかった。

三人は用心しながら歩き出す。武器はあったが、どんな魔物が現れるかわからない、グランも不安を抱えながらもそれをルリアとビィにはわからないようにした。

少し歩いて気が付いたのは、ここは正しく終つひの場所であると言う事だった。

「グラン、ここはもしかして……」

「ああ……これは、きつと……」

石造りの建物の残骸に混ざる岩。始めそう思ったものは、しかしじつと見てみれば冷たい石の棺であった。

「ここは、墓地だったのだ。」

何かの拍子でか、その重い棺の蓋はずれているのが殆どであるが、不思議とその中身はない。勿論グランも態々中身を見たいとは思わないが、しかしあまりにもあるべきものが無いという事実が不気味に思えた。

早く場所を移した方が良い、そうグランが思った時彼の耳は気味の悪い声をとらえた。

「ルリア、下がって！」

「え、はい！」

直ぐにルリアを後ろへと下げ剣を構えた。

石の器がある広間、崖に挟まれ狭い出口だがその先に空が見えた。だがそこに、尖り帽子の様なボロ布をかぶった何者かが居た。

人間、ではあるように思えた。だがその足取りは怪しく、何よりもその両手に持った鋭利な刃物がグランに強い警戒心を抱かせる。鈍い鉄の色、それは金属由来の物ではなく、命を刻んだ故に出来上がる赤黒さ。

そしてその人物はグラン達の存在に気が付く。

「——！」

「っう!?!」

人の物とは思えない甲高い悲鳴にも似た叫びを上げそいつは襲い掛かってきた。迷

いなく走り迫るその狂人とも見える者、その手に持った凶刃がグランの身体を裂こうとした。

「ちっ!」

こちらにも迷う暇はない、グランは構えていたミスリルソードを咄嗟に振り上げ辛うじてその刃を受け止めた。

「お、おいおいなんだよお!」

「ビイはルリアと後ろへ! でやあ!」

「!」

小さくも勢いのある蹴りを相手に食らわせ体勢を崩す。その隙にグランは反撃とばかりにミスリルソードを振り下ろした。

「!!」

「うっ!」

だが態勢を崩しながらも相手は二本あった刃物を交差させそれを受け止める。見た目は貧相な男に思えた。だが異常な力でグランが振り下ろした剣を受け止めるところか、押し返そうとしている。

「!」

(なんだ、こいつは……っ!? アンデッドなのか!? けど、腐ってるようでも無い!)

接近して初めて見えたその顔。精気を感じない？せ細った顔には、人間らしい感情は見えずただ殺意が溢れているように思えた。

「くそ、離れろっ！」

「!?!」

「でええいつ!!」

「!?!」

再度蹴りを放つ。先程よりも強く、確実に相手を転倒させる強さで。上手く相手は押し出され、そして地面へと転がった。刃も両手から零れ落ちる。

一瞬、グランは相手との対話は可能か考えた。だが倒れながら自分を睨みつけた相手の狂気の瞳を見て改める。倒すべきだと。

「はあああつ!!」

「!?!?!?!」

それは人ではない。その存在は自分だけでなく、後ろにいるルリアとビィにも襲い掛かる殺意。だからこそグランは剣を迷いなく振り下ろし、相手を両断した。

その者は、悲鳴を短く発すると、その場に倒れ込み動かなくなった。

「グ、グラン？」

「ルリア、ビィ！早くここから離れよう！ここは危け——」

不安げに話しかけるルリアに急ぎ移動するよう言おうとした。振り向き危険だと言おうとしたが、言葉が詰まる。

ルリアとビイの後ろから、今し方倒したばかりの人物と同じ風貌をした者がルリアとビイに向かい刃を振り下ろそうとしていた。

避けて、逃げて、そう言おうとグランは口を開いた。だが咄嗟の事で言葉が出て来ない。

庇うか、いや間に合わない。

「ルリ——！」

「え？」

「——！」

手を伸ばすが届かない。間に合わない。

守れない——。

「——!？」

「うひゃあつ!？」

その時、ルリアを襲った者とビイの悲鳴は同時に上がった。

ルリアも慌てて振り向いた。

「きゃあつ!？」

「ルリアー！」

驚きふら付いた彼女をグランが抱き寄せた。ビイも急いで二人の傍へと飛んだ。

彼らの目の前で襲い掛かってきた狂人が、背中から大剣を突き刺され多量の血を滴らせていた。

呻き声をあげる狂人であったが、すぐにその剣は抜き取られた。そしてそのまま地面へと倒れていく。

狂人が倒れると、その後ろに隠れ見えていなかった一人の人物が現れる。

うす汚れたポロ布を見に纏い、しかしそのポロ布の下に見えた歪んだ騎士の鎧。おそらく騎士か戦士か、戦いを生業とするべき者。手には果てた狂人の血で染まるバスタードソードを持つ。

「な、なんだってんだ、さっきからようー！」

ビイがそう叫ぶのも無理はない。

突然襲い掛かれ、グランが狂人を倒したと思えばもう一人に襲われたが、その一人が新たに表れた怪しい人物に殺されたのだ。

少女であるルリアーにとっては大きな精神的負担を与える出来事だ。

この場合は、あまりに血生臭い。

「……」

大剣の血を払うと騎士と思われる者がグラン達をジツと見つめる。顔から脚先までを、ねっとりと言うような視線を感じ、グラン達は身震いがした。

「あ、貴方は……！」

「……ほう」

グランが声を発すると、その騎士は興味深そうな声を上げた。低くしゃがれた男の声だった。

「貴公達、どうもまともなようだな」

「ま、まとも？ 何を言って」

「見た所ダークリングも見えんな、血の気も生者そのもの。いや、それ以上にその生き生きとした眼……そうか、そうか、なんと珍しい」

一人勝手に納得した騎士は喉から「クククツ」と愉快そうな笑い声を出す。

「や、やいやい！ 一人で何納得してんだ！ お、お前は誰だよ！」

「……ふ、ふふ！ まともと思えば、つるんでいるのは喋るトカゲか」

「オイラはトカゲじゃねえ！」

ビイは歴とした竜である。まだ小さき子竜であるが、しかしそれは間違いないのだ。だからこそ「トカゲ」は彼にとって最大の侮辱になる。

「……助けてくれたんですか？」

グランは気になって、いる事を聞いた。

何者であるかよりも、自分達に害が無いか知りたかった。この騎士の介入がルリアを助けた事は間違いなかったからだ。

「そう思うか？」

「違うんですか……」

からかうような言い方をされ、グランはミスリルソードを両手で握りなおした。それを見て騎士はまた「クククツ」と喉を鳴らした。

「そうだな……結果的に助けたと言える。丁度良くマヌケな背中があつたからな。背後から攻^{バックスタブ}撃した。しかし狂い果てた墓守の仲間割れとでも思ったんでな、お前達が人間であるとわからなければ殺していたな」

「ひええっ!？」

男の物騒な言い方にビイは悲鳴を上げてグランの後ろに回り込んだ。

「安心しろ、人間は殺さん。ましてまともであるなら」

「……今の奴らは人間じゃないんですか」

「……貴様等、何も知らないのか？」

「……ここで男はグラン達の事を強く、いよいよもって訝しんだ。

「この灰の墓所に居て何も知らぬと？」

「灰の墓所？ やつぱりここはお墓なんですか？」

「……本当に知らぬのか。むう」

ルリアの純粋さが伝わったのだろうか、男は少し困ったように唸った。

「……どこから来た」

「え？」

「どこから来たかと聞いた」

「えっと……どこと言われると、ザンクティンゼルと言う島から」

「ザンクティンゼル？ いや、島だと？ 態々海でも渡ったのか？」

「海い？ ここにはアウギユステみてえな海があんのかよ？」

「アウギユステ……貴様等何を言ってる」

明らかに互いの話がかみ合わなかった。互いの常識からして何か大きくずれているようだった。

「……いいだろう、嘘も言えんような子供だ。一先ずついて来い」

「え？ あ、おい待てよ！ ついて来いって、お前の正体も聞いてねえんだぞ！」

「必要ない」

「いや、あるだろっ!? そっちだつてオイラ達の事ろく聞かねえでついて来いって、信用できるかよ!?!」

「ならばここに残るか？」

「そ、それはあ……」

ビイも間違っていないが、しかし男に“ここ”と言われ黙ってしまふ。

薄暗い墓地の中、冷静に耳をすませば先程の狂人と似た呻き声が聞こえてくる気がした。

「悪い事は言わん、ついて来い。何も知らぬ貴様らがここに居ても亡者になるだけだ」

「亡者？」

「……はあ、本当に知らぬか」

「あ、おい待ってっ！」

最早語る事は無いとばかりに男は歩き出した。

「グラン……」

「……行こう、今はあの人だけが頼りだから」

不安はある。むしろ募るばかりだった。しかし今話を通じて道を教えてくれるのは男しかいなかった。姿の見えないカタリナ達の事も気になる。仲間達と合流するには、ここから移動するしかないのだ。グラン達は彼の後に続いた。

万が一を考えて男には近すぎないように歩いた。ボロ布とその下の兜で表情も見えぬ男を用心しない道理も無い。

だがしかし——

「僕はグランと言います」

「……名か」

「はい」

グランと言う男は実に実直な男であった。例え怪しき男でも、仮に一時の出会いでも、自身の名を名乗る事を礼とした。

「あ、私はルリアです！」

「オイラはビィってんだ。言っとくけど、トカゲじゃねえからな！」

グランが名を名乗ると、警戒をしつつもルリアもビィも先ほどに比べ和んだ様子で男へと自分の名を名乗る。

その様子を不思議そうに男は見ていた。

「……」

「な、なんだよ黙りこくって。お前の名前も教えてくれたって良いじゃねえか」

「……ひさしく、名など名乗っていないのにな」

「名乗ってない？ どういう事ですか？」

「……
// アッシュ
灰 // だ」

「え？」

ルリアの質問には答えず、だが男ははつきりと一つの「名」を名乗った。

「灰」と、どうしても呼びたいならば、そう俺の事は呼ぶと言い」

「アツシユ、さんですか……なんだかカッコいい名前です！」

「……」

ルリアが爛漫の笑みを浮かべ灰——アツシユの名を褒める。それを見てアツシユはどう答えていいのか分からない様子だった。

「本当に……こんな人間がどうして、まったく……」

困っている、よりも呆れている方が大きいようだった。

そんなアツシユの事を知らず、灰を知らず、亡者も生者も、何もかも知らぬ三人。墓所を抜けた先、そんな三人が見たのは——。

「……」

「覚えておけ、グラン。貴様等が何処から来て、何が目的か知らん。偶然迷い込んだのか、目指して来たのか、どの道ここに来てしまった以上これは「出発」なのだ。後戻りは出来ず、留まる事も意味はない」

薄く薄く……燃え尽きた灰の様な空。その空は美しく見えながら、しかしあまりに闇が深く感じる。命を感じない、終わりを迎えようとする空。

そして混沌とした、瓦礫が集まったような城壁。

「進むしかない道に——絶望と希望、お前達はこの世界に何を見出すかな？」

アツシユのその言葉は、絶望も希望も、何も知らぬグラン達を試すようでもあった。

NEXT — 『BONFIRE LIT』

BONFIRE LIT

■ — Cemetery of Ash

終わりを迎えた者達の場所、灰の墓所。

死した者達、動かぬ屍の住処。

「うっひゃあ!? 矢がかすったぞ!」

そんな死者の眠りを妨げる程に大きな叫び声をあげるのはビィだった。

尤もビィを叫ばせている原因は正気を失った墓守達である。

「はわっ!?! アツシユさん!?! こ、この人達は……っ!?!」

「かまうな、奴ら自身最早人と亡者の区別も出来ん狂った墓守だ。グラン、片付けろ」

「簡単に言ってくれて……っ!」

襲い掛かってきた狂人——墓守達の攻撃をグランは必死に受け流しては反撃。自分の後ろで狼狽えるばかりのルリアを何とか守りながら戦い続けている。

この少し前、灰の墓所と呼ばれるこの場所で目覚めたグラン達三人は、謎の男アツシユに偶然助けられた。

この土地の名も、道も何も知らないグラン達は「ついて来い」と言うアツシユの言葉に従い、その後について行った。そこでグランは、終わりを迎えようとする灰色の空を見た。

それについてアツシユから説明は無かった、ただ一言「終わりを感ずるだろう」とだけ、そう話した。

そんな灰色の空を望む崖で一時呆然とするグラン達をよそに、アツシユは墓所から出て少し曲がった先にある人骨の集まり、剣の刺さった燻る篝火へと向かった。

グランが「それは？」と聞くと「篝火だ」とアツシユは答えた。そして彼がその篝火に手をかざすと燻った篝火は一気に燃え出した。

「これから見続けるかもしれないものだ」

「え？」

「よく覚えているろ」

「あ、ちよつと！」

作業的に篝火を点火するとアツシユは直ぐに移動を再開した。グランが慌ててついて行くと、徐にアツシユはバスタードソードを両手で握り直し戦闘態勢へと移った。

「……なにか居るんですか?」

「居る。狂い果てた墓守共が」

彼に言われ良くあたりを見れば、細い道に蹲るボロ布を纏う者達がいた。ぼつりぼつりと蹲り、あるいは立ち竦むその墓守達。意味の無い呻き声だけを発する精気を失った者達。

「よみがえる亡者を見張り殺すのがこいつ等の仕事だ。だが今やこいつ等も亡者と変わらん。さあ剣を抜け、墓地から出てくる者は皆殺そうとするぞ」

意味の分からない事を言うアツシユであったが、呻き声を上げる墓守が顔を上げて自分達に強い殺気と敵意を向けているのは確かに分かった。グランはミスリルソードを構えた。

そうして彼らは狂った墓守との戦闘を開始したのだ。

「きゃあつ!! ゆ、弓矢ですう!」

「ボウガンだけありやつ!!」

「火矢か!! 厄介だなっ!」

グラン達が最初に出会った墓守が特殊だったのであろうか、あの倒した墓守が持っていた血の香る双剣を持つ者はおらず、今自分達に襲い掛かる墓守の持つ武器は上等とは言えなかった。粗末な盾が唯一身を護る壁となり、刃こぼれの激しい剣や槍が墓守達の

武器だ。酷い者は刃が完全に折れた短剣にもならないような物を必死に振り回す。しかし彼ら唯一の遠距離武器であるボウガン、それより放たれる火矢は足場も悪く高低差のあるこの墓所ではそれなりの脅威であった。

「狼狽えるな……俺が前に出てやる。お前はその小娘とトカゲを護つてろ」
「だからトカゲじゃねえっての！」

しかしアツシユはそれに一切怯む様子も無い。飛んでくる火矢は軌道を見極め避け、突進してくる別の敵は非常に軽快なローリングで避けながらバスタードソードで墓守達を倒していった。

「す、すげえ」

「慣れてるのか……こいつらとの戦いに？」

そのアツシユの活躍にビィは声を漏らした。

グランもまた彼の動きに注目した。自分が知る戦い方とは全く違う、騎士とも戦士ともつかない歪でありながらも迷いの無い男の強さを。

「この程度に手間取るなよ。一生墓地で過ぐす事になるぞ」

崖際の墓守を崖下へ蹴り落としながらアツシユは遅れるグラン達へ声をかける。

「そ、そうは言ってもよう！ こっちはまだ気がついたばっかでわけわかんねえままなんだぜ！ グランはこんなやつ等と戦った事ねえんだ！」

「慣れろ」

「雑な一言だな!」

全くアドバイスにならない一言を受けてビイはシヨックを受けていた。一方でグランは剣を握る手に力を込め直した。

「……慣れるかはわからないけど、今はここを切り抜けないと!」

「あ、グラン!」

そう言つて彼は駆け出し、ボウガンを構える墓守へと肉薄した。

ボウガン墓守の傍に居た短刀を持った墓守がグランへと襲い掛かるが、ミスリルソードを下から振り上げ墓守の手から短刀を弾き飛ばすとそのまま短刀墓守を蹴り飛ばし、後ろにある岩へと叩き付けた。

それを見てボウガン墓守は、近づかれた事でもう遠距離武器が使えないと判断し慌ててボロボロの槍に持ち変えたが、素早く近づいたグランは墓守が武器を使う前にミスリルソードを振るつて無力化した。

「これでボウガンをつぶした!」

「やったぜグラン!」

厄介な遠距離武器を持つ敵を倒したグラン。ビイも手を振り上げ歓声を上げる。

「グランっ! まだ!」

「え……っ!?」

しかしルリアがグランの横を指差し叫んだ。そこには岩に叩きつけられた墓守が立ち上がって拾い上げた短刀を振り上げていた。

「しまっ!?!」

「——!」

「ぬううんっ!」

「——!?!」

グランへとその短刀と突き刺そうとした墓守であるが、いつの間にか近づいていたアツシユが踏み込みながらバスタードソードを下から振り上げた。すると墓守はそのまま打ち上げられ甲高い悲鳴を上げた。

「アツシユさん!?!」

「油断するな馬鹿者」

やせ細った墓守とは言え一人の人間を剣一本で打ち上げると言う人間離れた怪力を見せるアツシユ。彼はグランを叱責しながらもバスタードソードを両手で頭上まで振り上げる。そして打ち上がった墓守が地面へと落ちるのと同時にその重量と腕力を全て乗せた一撃を降り下げた。斬るよりも叩き潰すようなその攻撃で墓守が声を出す事も無く絶命し、同時に血の溜まった袋が弾ける様にグランへと返り血が飛び散った。

「うえっ!？」

「亡者になり果てるような奴は簡単にくだばらん。やる以上完全に止めをさせ」

「うえ……なんだこの血……ひ、酷い味が口に……!」

助けてくれた事への感謝を言いたいグランだったが、墓守の腐ったような返り血が入り酷い吐き気を覚えそれどころではなかった。

「おい大丈夫かグラン!？」

「ぺって! ペーってして下さい!」

慌てて駆け寄るビィとルリアが如何にかしようとして声をかけ、グランもグランで口の血を必死に吐き出していた。

それを見てアツシユは呆れた様子でグランが落ち着くのを待った。

「うえ……」

「落ち着いたか?」

「え、ええ……すみません、助けてくれたのに」

「まあかまわん、酷い味だろうからな」

クククとしやがれた声で笑うアツシユ。グランは恥ずかしいやら申し訳ないやらで顔を赤面させた。

「それで、もう他の墓守は?」

「全部倒した。進むぞ」

「あ、待てよう！」

質問に短く答えまたスタスタと歩き出すアツシユであつたが、ビイが慌てて追いかけた。

「進むとか言うけどよう、まずオイラ達どこに向かつてんだよ」

「そ、そうですね。出来れば休めれる場所があれば……カタリナ達も探さないでだし」

道がわからないとはいえ、目的地も分からないままあても無くアツシユについていく事は出来ない。ビイもルリアも、そしてグランも身体を休め姿の見えない他の仲間を探したかった。

それを聞いたアツシユは数秒何か考えると口を開いた。

「……お前達の仲間がどんな奴等かは知らん。どうやってここに来たかもわからんが……ここら辺で逸れたのなら、自ずと行く場所など一つしかない」

「へえ、そうなのか？」

「わかつたならついて来い」

「つておい!? だからその場所がどんな所か教えろよ!？」

「行けば分かる」

「ちよ、おいつてば! ほんと大丈夫なのかよう!？」

アツシユの周りを飛びながら文句を言うビー。

ビーと同様の不安を覚えながらも、グランとルリアもまたアツシユの後を追った。

その後また何体かの墓守を倒したグラン達は、墓地から少し離れた所にある石門の前
に来た。その門の前でアツシユは立ち止まり暫し自身の得物を眺めた。

「どうかしましたか？」

「……気にするな。少し“武器を選んだ”だけだ」

得物を眺めるだけで武器を選ぶと言うのがあまり要領を得ないが、この男の言う事は
そんな事ばかりだ。それよりもグラン達は気になる事があった。

「ところで、その……」

「なんだ？」

「この門は、一体……」

グランは目の前の門を指差した。当たり障りない門と言えるかは分からないが、しか
しなにか可笑しいものと言えるものでもない。だがグラン達は気になったのだ。その
門にかかる霧の事が。

「……霧が見えるのか」

「はい……つて、え？ アツシユさん見えませんですか？」

「今は、な。しかしそうか。霧が見えていると言うなら、やはりお前達は俺の世界とは別

の……」

アツシユは改めて興味深そうにグラン達の事を見た。兜から覗く鋭い視線がグラン達を射抜くように見つめる。

「あ、あのお……」

「……しかし、霊体と言うわけでもないか。奇妙な奴等だ」

「いや、おめえに言われたくねえよ！」

「そうか」

アツシユの勝手な呟きに怒鳴るビィであった。だがビィの言葉に大した反応も見せずアツシユは真直ぐに門の中へと向かう。

「え、ちよつと!？」

「お前達はそこで待つて居ろ」

「おいおい、急に何言つてんだよ！ お前が道案内してくれるんだろ!？」

「その準備をする。暫く騒がしくなるが気にしなくていい」

「いやいや、気になるってーの!」

「そ、そうです！ 何かは知りませんが、準備なら私達も何かお手伝いを……!」

「いらん、足手纏いだ」

「はう!？」

ルリアの言葉をばっさり切り捨てるアツシユ。ビイもそんな彼の対応にまいつている様子だった。

「……この霧の中には、一体なにがあるんですか？」

グランがそう問いかけるとアツシユはジツとグランを見て一言だけ「ただ埃臭い一人の英雄だ」と謎の一言を残し霧へと消えたアツシユを見送る事しかできなかった三人。不慣れた土地で待てと言われてしまうとそうした方がいいのは確かだった。

「ど、どうしましょうか……アツシユさんはああ言っていましたけど」

「うーん、言い方はあれだけどオイラ達の事気にしてくれた感じだったな」

ビイはアツシユの冷たい態度に不満はあったが、同時にその中に自分達を気遣うような何かを感じ取っていた。

「けど騒がしくなるって一体なんだろうな？」

「わからない、けど多分——」

「直ぐにわかる」とグランが言い終わるより先に、門の先より激しい破壊音が聞こえてきた。

「な、なんだあ!？」

「戦闘……っ!」

瓦礫を粉碎し、誰かが大きなナニかと戦う音が聞こえる。

鉄と鉄が、刃がぶつかり合う音が聞こえる。

「準備って戦いの事かよ!?!」

「グラン……!」

「わかってる! 放つて置けない!」

自分達のために、アツシユは戦っている。そう思うと悩む暇は無かった。グラン達は駆け出しあの「色の無い霧」を抜ける。

霧を抜けるとそこには廃墟となった広場があった。門から入って右側は崖となっており、反対側の建物には木の根が張り、その場も墓地として使われているのか棺と墓石で埋まっている。

そんな広間の中央、そこには斧槍を手に持った巨体と戦うアツシユの姿があった。

二 I u d e x o f A s h

「アツシユさん!!」

剣を引き抜きグランは鎧の巨体と戦うアツシユの元に駆けた。その声に気が付くとアツシユは舌打ちを打った。

「何故来た。待っていると言ったはずだ」

「助けに来たに決まってるんだろ！ 準備とは言ってたけど、戦うなんて聞いてねえよ！」
「下がれ、足手纏いだ」

アツシユが斧槍の攻撃を弾きグラン達の下に寄る。片方は崖となつてゐる開けた広場、その隅に逃げるよう彼は促したが、グランは首を振った。

「二人だけで戦わせるなんて！」

「奴は墓守共とは違ふ、死ぬぞ」

グランは果敢に剣を取つたがアツシユはグラン達を目障りに感じていた。

そして新たな挑戦者——見極めるべき者達を見て、鎧の巨漢は狙いをグラン達にも定め出した。

「うわあ!? き、来たぞお！」

「ちい……っ！ 散れ馬鹿者！」

「うわっ!？」

斧槍を突き出したままの突進を見てビィが悲鳴を上げた。アツシユが忌々しそうに舌打ちをし、グラン達を突き飛ばし自身も突進を避けた。

グラン達が避けた事で斧槍はそのまま広場の朽ちた棺や墓標にぶつかり、それを吹き飛ばす。

「な、なんてパワー……うっ!？」

「何なんでしよう、アレは……?」

巨体に見合ったパワーで朽ちたとは言え石造りの棺や墓標を粉々にした力に驚くグラン達。だがグラン達が更に驚いたのは、その鎧の背中から溢れ蠢くどす黒い血にも似た色の触手だった。

「だから待てと言ったのだ」

「ア、・アツシユさんあれは……?」

「『濃』だ」

「う、濃い!？」

「一々驚くな。悠長に説明してる暇は無いぞ」

相変わらず説明になっっていない説明にビィが驚くが、巨漢は斧槍を構え直しグラン達を見た。そして改めてグランもその存在を見る。

今にも朽ちてしまいそうなほど色あせた鎧。人が入っているのかも怪しい巨漢。それは大人の男性性ほどもあろう重量の斧槍を片手で軽々と扱ってみせている。

「来るか……せめて娘とトカゲは離れている。死んでも知らんぞ」

「は、はい!」

「くっそおー! グラン負けるなよっ!」

流石に自分達は足手纏いと感じ、ルリアとビィは二人から離れ広場の隅に身を隠し、

残った二人は武器を構えなおす。

「斧槍の攻撃はリーチも長い。突撃は強力だがよく見れば避けれる。隙をよく狙え」
「はい！」

グランの返事を合図のようにして、巨漢が攻撃をしかけた。長い斧槍を二人に向かい振り下ろす。二人は直ぐに攻撃を避けた。

「いいぞ、よく見ている」

土壇場だが無事攻撃を避けて見せたグランを褒めるアツシユ。だが特に感嘆の念は無い。むしろ出来て当然、そう言った意味を込めた皮肉のようにグランは聞こえた。

「このっ！」

斧槍の振り下ろしの後に出来た隙を狙いグランがミスリルソードで攻撃をしたが、硬い鎧に阻まれ攻撃が弾かれてしまう。

「か、硬い……！」

「馬鹿者、直ぐに下がれ」

「うわあっ!?!」

狙った隙は良かったが、想像以上に強固であった鎧の強度にグランが怯む。相手もまたその隙を見逃さず、今度は空いた手で彼を掴もうとした。

しかしグランの装備する鎧からはみ出たフードをアツシユが掴み、そのまま彼を引き

寄せ何を逃れる。

「す、すみません」

「素直に切りつけるだけの奴があるか、やるならもつと勢いを付けろ」

まだ年の若いグランであるが彼も戦いの素人ではない。甲冑を着込んだ者の相手をした事は何度もある。しかし大抵の相手は刃で切るよりも、叩き切った衝撃などで難無く倒せる事も多くついその感覚で攻撃を仕掛けてしまった。

「けれどそんな隙は……」

「何を言う、無ければ作るのだ」

「つ、作る?」

「見てろ」

アツシユはグランを一步下がらせると、いつの間にか左手に装備していた小盾を構えながら巨漢の前進んだ。

「ア、アツシユさん危ない!」

グランの制止を聞かず進むアツシユ。その彼に対して、巨漢は斧槍を横に薙ぎ払った。勢いのある薙ぎ払い、その刃に直撃であれば肉体は両断され、柄にぶつかつたとしても骨を砕かれるだろう。

だがそんな攻撃に彼は怯まず進み、そして攻撃が当たる直前素早く小盾を振るつた。

「ふっー！」

「——っ!？」

するとどうだろうか。鉄と鉄、斧槍と小盾がぶつかり火花が散ったと思えば、斧槍の方が大きく弾かれ、その反動で巨漢は体勢を崩したではないか。

「うええーっ!？」

「す、すごいですう……」

まさかあの攻撃を小盾、しかも片手で弾くとは思わず影で見ていたビー達が驚きの声を上げた。

そんな二人の反応を気にする様子も無く、アツシユはバスタードソードを一度巨漢の腹へと叩き込むともう一度引き更に勢いをつけもう一撃殴りつけるように横薙ぎに切り抜いた。巨漢もたまらず後ろに崩れた。

「こうするんだ」

「か、簡単に言いますね……いや、凄いですけど」

参考にはなったが、まず自分が小盾であの一撃をあんな容易くはじけるかグランには疑問だった。

「これが出来んのなら俺が引き付けておいてやる。背後から攻撃し続けろ」

「な、なんか卑怯だなあ」

「あれ相手に卑怯も糞もあるか。早く構え直せ」

「は、はい！」

戦斧を杖にして体を起こす巨漢。アツシユはバスタードソード両手で握ると巨漢へと向かい、グランも慌ててミスリルソードを持ち直し後に続いた。

アツシユはグランへ行つたように巨漢の前に出て注意を引きつけた。そしてグランはその後ろへと周り相手の鎧の隙間を狙い何度か切りつけていった。戦斧の大振りにさえ注意をしていれば相手の注意がアツシユに向いているだけに戦いやすかった。

これならもう倒せそうだ——そうグランは思った時、アツシユが声を上げた。

「気を抜くんじやない！ 一度離れろ！」

「えっ!？」

アツシユが怒鳴り声を上げながら巨漢より距離を置いた。それを見てグランは、驚き何故彼が距離を取りだしたのか分からなかった。だが先程もアツシユはグランを引っ張り助けた。何かある、危険を感じ取ったグランは、少し遅れて巨漢から距離を取ろうとする。

するとそれとほぼ同時に巨漢の身から腐った血と膿が噴き出した。

「うっ!？」

その汚物とも言える液体が身体に降りかかる。グランは嫌悪感を露わにしたがその

汚物を拭きとる暇など無かった。

「な、なんだよありやよお……!?!」

「……うっ!」

「ルリア……! だ、大丈夫か!?!」

ビィとルリアは“それ”を見た。ウジュウジュと蠢くそのおぞましいものを。ビィは驚く事しか出来ず、ルリアは思わず口を押えた。

「こ、怖い……わからない、何、アレは……なに……!?!」

「ルリア……?」

ルリアは怯えていた。“それ”はただ穢れたものではない。人より生まれる穢れ、人より生じる闇の塊。その深淵の気配をルリアは感じ取った。

「アツシユさん……アツシユさんっ!?! これ、これは何ですか……!?!」

「……」

腐る体液を滴らせ、その鎧の内からあふれ出たのは腐る肉塊か、それとも形を得た深淵か。

巨漢の姿を隠す程溢れ出たおぞましき物質。骨か枯れ枝の如き腕。怪しい瞳が赤く光り、それは魔物の如く口を開き咆哮をあげた。

「言っただろう……あれは膿だ」

「う、み……」

「そうだ。人に生じる、〃人の膿〃……目に刻め、アレは滅びの予兆だ」

——今この世界は、膿で溢れている。

■ ■
三 P u s o f M a n

〃それ〃が何かは誰もわからぬ。

ただ火が陰り、呪いに溢れたこの世界に生まれたその〃それ〃は、人の内へと生じる
〃膿〃であると言う。

そしてそれは滅びの予兆である。膿は蔓延るのだ。滅びが近づき、深淵が溢れるまま
に——。

「——！！」

「ぐあああつ!? な、なんてパワー！」

「グランツ!!」

「だ、大丈夫！ ビイはルリアから離れないで！」

「お、おう！」

〃それ〃は甲高い獣にも似た咆哮を上げながら口を開け地面事グランを噛み潰そう

とした。

咄嗟にそれを避け、飛び散る破片から目を護る。

「アツシユさん、奴は何なんですか!?! 膿ってどういう事です!?!」

「説明は後だ。したところで理解できるか怪しい」

「じゃあどう倒せばいいんですか!」

「見た目に惑わされるな」

「——!!」

「ふんっ!」

その「膿」と呼ばれる物の、おどろおどろしい姿にグランは怯むがアツシユにそんな様子はなく、膿の攻撃を避けてはバスタードソードで切り付けていった。

「反応は鈍いがダメージはある。攻撃を続ける」

「また軽く言ってくれて……!」

だがアツシユの言う様に攻撃をする他ない。グランは今まで以上に攻撃だけでなく回避を心がけた。

戦斧をふるい時に技を繰り出す巨漢の姿に比べれば、膿の攻撃は単純な物だった。戦斧を狂ったように振り回し、膿本体が噛みついたりとするのみだ。だがその巨大な異形の姿での攻撃は単純であるほどに強い。

装着した鎧と体格のため元より尋常でない重量であった巨漢であるが、一瞬の内に更に増えたその重量から繰り出される攻撃はどれも重く、盾で防いだとしても怯む事は必ずであった。

そして異形の姿は相手に心理的威圧感を与えるのみならず、攻撃の効果を強く感じさせないため戦っているグランのストレスは大きかった。

「本当にこれ攻撃通ってるんですか!？」

「案ずるな、しつかり苦しんでいる」

「吠えてるだけにしか見えないですよー」

苦しんでいるのか、はたまた狂って暴れているだけなのかグランには判断がつかない。しかしアツシユは「大丈夫」としか答えなかった。

すると膿が新しい動きを見せた。骨の様な腕を地面へと叩きつけ、脚を踏ん張るような動作をした。

「……む。おい、もう一度距離をとれ」

「また……!？」

何か脅威となる動作なのだろう、アツシユに言われ今度はグランも素早く動き膿から距離を取った。

グラン達の動きに関係なく膿はそのまま踏ん張った姿勢から強く上へ跳躍、膿に隠れ

た巨漢が戦斧を下に向けると一気に落下し地面へと戦斧の切っ先を突き刺し、激しい衝撃が地面を揺らした。

「見た目のわりによく動く……!」

「そう言うものだアレは。だがそろそろか……」

不意にアツシユは左手腰辺りに伸ばした。その動作をグランは見えていたが、一度瞬きをしてみれば、何時の間にかアツシユの左手にあつた小盾が消えている。だがそれ以上に驚いたのは、彼の左手が赤く燃えあがっていたのだ。

「え、あ……っ?! アツシユさん、その手燃えて……!?!」

「……貴様呪術を知らぬか?」

「え、じゅ……呪術?」

「はあ……それも後で言う」

この場所での常識であるのかわからないが、酷く驚いた様子のグランを見てアツシユは深いため息を吐いた。

彼は燃える左手をゆらりと構えると更に手が、その炎が燃え上がり、その掌に火球が生まれていった。

「シ……ッ!」

そしてその炎が最大にまで燃えあがると、アツシユは勢い良くその火球を臍へと向か

い放り投げた。

火球は炎の勢いを衰える事無く飛んで行き膿にぶつかった。それと同時に火球は弾ける様に爆発し膿が悲鳴を上げた。

「苦しんでいる……炎に弱いのか！」

「膿は『消毒』するのが一番だ。奴ももう体力は少ない、一気に燃やし尽くしてくれる」

「炎……そうだ、なら！ アツシユさん、僕に——僕達に任せてもらえますか！」

「お前『達』で……？」

炎が弱点と知ってグランは何か妙案が浮かんだらしい。アツシユは既に左手に火球を生み出そうとしていたが、グランの自信にあふれる瞳を見て考えを変えたのかその火球を消した。

「……やってみろ」

「はい！」

アツシユは止めをグランに任すことにした。それは単純な興味からの事だった。

見知らぬ何処から来たこの少年と、その仲間がいかにしてアレに立ち向かうのか、そして倒して見せるのかが気になった。

「ルリアー！ 奴は炎が弱点だ……なら！」

「炎、そうか……！ わかりました、なら私だつて！」

グランは物陰に隠れていたルリアに向かい膿の弱点を叫ぶ。するとルリアはグランの意図を理解しやはり自信に満ちた表情を浮かべた。

「炎の叫び、詠います……!」

「ぬ……ッ!」

ルリアが両手を前へと突き出し呪文を唱える。すると彼女の胸にある飾りの宝石が淡く光り出した。だがそれだけでなく強い力が溢れ出ていた。

思わずアツシユが唸る。その力の正体がわからず、今度は彼が驚く番だった。

そしてその光は強さを増し、ルリアが呪文を唱え終わると激しく輝いた。

「お願い、力を貸して……コロツサスッ!!」

「!!」

蒼の光が炎の赤へと変わる。すると彼女の背後より火山の噴火の如くの勢いで膿よりもはるかに巨大な巨人が飛び出して来た。

「その怪物を!」

「!」

巨人——コロツサスは、ルリアの指示を受けると「任せろ」と言う様に頷き巨大な剣を握り膿へと迫った。それに膿も気が付いたがもう既に遅い。

「!!」

「——!?!」

コロツサスは剣へ炎を纏わせるとそれを振り上げた。膿は狂った威嚇の声を上げたがコロツサス対し意味など無い。剣が膿へと振り下ろされると炎が舞い上がった。

「おお!? この力は……!?! ……これは!!」

巨人の一撃、炎の嵐が巻き起こり、膿の断末魔が聞こえる。

アツシユはその光景を見て何を思ったのだろうか、何を抱いたのだろうか。それは恐れか、畏怖か。

あるいは、希望だったのか。

それをアツシユ自身が自覚する暇も無く、膿の断末魔が止むと炎もまた収まりコロツサスは姿を消していった。

その場には膿が消えた巨漢の姿があった。

「まだ……!?!」

「いや……もう、終わった」

グランが剣を向けたがそれをアツシユは制止した。

巨漢は動かさずに暫し仁王立ちでいた。だがグラリ……とその身体を傾かせると、膝をつきながら俯せに倒れ霧の如くその姿を消していった。

その最期をグランは不思議そうに見ていた。

「終わった、のか……?」

「ああ、終わった」

膿どころか全ての痕跡も残さず消えた巨漢の最期に微妙な達成感を得たグラン。とにかく終わったと言う事で良いのだろう、そう思う様にしているとアツシユがスタスタと広場の中央へと歩いていった。

グランが広場の中央を見ると、そこには何時の間にか骨がくべられた篝火に一本の剣が刺さっていた。

「これ、さつきも確か……」

「さっそく見る事になっただろう?」

「いや、そうですけど……なんでこれがここに」

「そう言う物だ。誰が何時燃やしたのか、誰が残し、遺したのか……ただずつとそこにある。そう言う物だ」

アツシユは篝火に向かい手を向けた。すると先程のように燻る篝火は激しく燃えあがる。

「……〃BONFIRE LIT〃」

「え?」

「よく燃えるだろう? 絶えず永久に燃えるかのように……そんな都合の良い物などな

かろうに」

「あの、どう言う……」

「気にするな、ただの戯言だ」

炎を燃やしたから何と言う事も無くアツシユはそのまま広場の出口へと向かい歩いて行った。

「おい待てよお!？」

「なんだが、マイペースな人ですね」

「あれマイペースって事で良いのかなあ……」

まるで真意のわからないアツシユの物言いに呆れるしかないグラン一行。しかし結局この場で頼る事が出来るのは彼だけだ。諦めてグラン達はアツシユの後を追った。

■ 四 Fire Keeper

広場の閉ざされた大扉を開くと、そこから見えたのは上へ続く坂道とその先にある塔が寄り添うように建つ建物だった。それ以外には何も無く相変わらず崩れた墓標、そして狂った墓守の姿が見える。

「またアイツらかよお……」

「もう慣れただろう」

「なわけあるか！」

「あはは……それでアツシユさん、あの建物は？」

「一先ずの目的地だ。あそこであればゆつくりと話も出来る」

「そりやいいや。さつきからわけわかんねえ事ばつかでオイラ疲れたぜ」

「それは此方の台詞だ……」

ビィは疲れた様子で話したが、同じようにアツシユも話す。

「先ほどの力……貴様等ただの小僧と小娘ではあるまい。その事も説明してもらおう」

「そうですね……お互いに」

異質と異質、二つが出会い混乱が起き互いの事がわからないでいる。

この出会いは何の意味があるのか、そもそも意味があるのか。彼等がそれを知るのはまだ先となるだろう。

一行は墓守に用心しつつ進むと直ぐに坂の上の建物へと辿り着いた。その出入り口周辺にまで墓守がいたが、不思議な事に建物の中へは入り込もうとはしていなかった。狂つてなおそこが自分達が立ち入る場所でないかと理解しているのだろうか。それとも何か侵入を拒んでいるのか。その理由はわからない。

ともかく安全である事はわかつているらしく、アツシユは特別警戒する様子も無く建

物の中へと入った。グラン達も続けて中へと入ると、目に見えない変化を感じ取った。

「……空気が、変わった？」

「はい……私もそう思いました。外とは少し違う気が……」

「そうかあ？ 相変わらず辛気臭い場所だぜ？」

「そうだけど……少し、神聖って言うのか……」

灰と埃の積もる建物内は非常に埃臭く、蠟燭と柱の間から差し込む弱い日の光しか内部を照らすものはない。だが確かにそこは何か外とは違う空間に思えた。

建物内部の中央には、中央を囲う様に空の玉座が複数あり、そこに続く階段をグラン達はおりていく。

「ケホ……っ！ うううほ、本当に大丈夫なのかよここ……オイラなんか気分悪くなりそうだぜ」

「不安がるな。こんな所だがどこよりも安全だ」

「本当かなあ……」

「……ビー君？」

「おう？ ……あ、ああ!？」

ビーが場の不気味さに怯えながら、埃臭さで咳をしているとその名を呼ぶ声があった。

ビーがその声の方を向くと、玉座に囲まれた建物中央から一人の女性の声があった。鎧

を着た長髪の女性、その姿を見てグラン達は目を見開いた。彼女は彼等の仲間であるカタリナその人だったのだ。

そして彼女だけではない、カタリナの傍には他の仲間達も揃っていたのだ。

「おおグラン達じゃねーか！」

「カタリナさんっ!?! それにラカムさん達も！」

「グラン、ルリア! やはり、ああ! ビイ君も！」

彼等は駆け出し手を取った。お互いに手を握り、夢でも幻でもないと確認した。

「カタリナ、無事だったんだね……! 良かった……!」

「ルリアも……ああ、良かった。君達の姿が無かった時はどうしようかと……」

ルリアとカタリナは二人抱き合い無事を喜び合った。

「ラカムさん達もよく無事で」

「ああ、幸いな事にな」

「そつちも無事それで何よりだぜ」

「オイゲンさんも無事で……イオ達も大丈夫だった？」

「うん私達グラン達探してる内にここについたのよ」

「団長さん達は今までどこに？」

「それは——」

「仲間は揃ったか？」

再会を喜び合っているとかすれた声でアツシユが割り込んだ。カタリナ達は初めて見る相手に驚き僅かに警戒した。

「グラン、こちらの御仁は……」

「えつとこの人は——」

グランはここに辿り着くまでの事をかいつまんで話した。

墓場で目覚め、狂える墓守に襲われそこをアツシユに助けられ、そして強敵を倒しここまで案内をしてもらった事を。

「そうか、三人を助けてくれたのか……すまない、恩人に無礼な態度をしてしまった」
「気にするな……こいつらが勝手に来ただけだ」

「へへ！ そう言ってるけど結構、ついで来い」って何度も言ったじゃねえか」

「クク……そうだな、何せ小僧と小娘、それに危なっかしいトカゲがいるんでな」

「ムキイ——ツ!? だからオイラはトカゲじゃねえ！」

小馬鹿にした態度のアツシユにプリプリと起こるビィ。そんな様子を見てグラン達は笑い、緊迫していた空気が和らいでいった。

「——灰の方」

そんな和やかな空気を緊迫したものに戻したのは、静かな女性の声だった。

「……来たか」

「アツシユさん、この人は……」

一同の背後に何時の間にか立っていたのは、仮面をかぶった一人の女性だった。アツシユは彼女を見て知っているような素振りを見せたためグランが女性が何者か聞いたのだが、アツシユはそれに答えず女性へと近づいた。

「……私をご存じなのですね」

「ああ」

「それは、火防女を？ ……それとも、私と言う火防女を？」

「さて……どうだろうな」

「そうですね……いえ、しかしどちらであつても何も変わらないでしょう」

「そうだ。何も変わらない。俺は灰で、お前は火防女だ」

仮面の女性は黙り込み、アツシユもまた黙った。静寂が訪れた。灰の積もる空間は、音を吸い込み更に静寂を強くした。

その静寂が何時まで続くのか分からない中、グラン達も緊張した面持ちとなり両者の内どちらかが口を開くのを待った。

「……そうですね。やはり、なにも変わる事は無い」

そして口を開いたのは女性の方であつた。

「——篝火にようこそ、火の無き灰の方。私は火防女。篝火を保ち、貴方に仕える者です。玉座を捨てた王たちを探し、取り戻す。そのために、私をお使いください」

その言葉の意味、灰と火防女の存在、この世界。それらをまだグラン達が理解する事は無い。

だがいざれ知る事となる。

火とは、陰りとは、王とは、そして——アッシュ灰とは何かを。

迷い人達

■ F i r e l i n k S h r i n e ■

古く寂びたその場所は、古くから「火継ぎの祭祀場」と呼ばれる。

古くから——それは100年前か、1000年前かは分からない。或いは、そう呼ばれた場所の名を継いだのかも知れない。いずれにしてもその様な場所に集まる者は、それもまた古より変わる事はなかった。

行き場を失った者、使命に迷う者、それを見守る者、呪われた「不死」、燃える事も燃え尽きる事もない「灰」。

そしてそんな場所にまた新たな旅人が訪れた。蒼穹の空からの旅人が——。

「俺達が目を覚ましたのは、この神殿周りの墓場だったんだ」

祭祀場で階段に座り話をするのは、「空」からの迷い人グラン達一行だった。グラ
ン、ルリア、ビイの三人は謎の男アッシュの助けを借り、離れ離れだった仲間と再会できると直ぐ自分達の状況を整理していた。

まず仲間の一人、騎空艇操舵士のラカムが話し出す。

「それぞれバラバラの場所で気絶しててな。気がついたら気味の悪い墓守共に囲まれてひやひやしたぜ……」

「我々も同様だ。気絶してる間は無視されていたようだが、私が生きているとわかると急に襲い掛かってきた……」

ウンザリとしているのは、女騎士のカタリナだった。個々はそれほど強いわけではない墓守であるが、狂い果てた集団を相手にするのは、精神を削られ想像以上に体力を消耗したようだ。

「そんで何とか墓守共を倒して一番目立つ建物を目指したわけよ。他に道もねえし、目立つ建物の方に行きゃあお前さんらも自然と集まると思ってたな」

「それは皆同じ考えだったわね。おかげでこんな状況でも直ぐに合流できたわ」

「ほんと……一人だったらゾツとするわ」

隻眼の騎空士オイゲン、妖艶なるロゼッタ、魔法使いイオ。夫々もまた狂った墓守を相手に生き延びてこの祭祀場へとたどり着いた。

「こん中は安全らしいからな。一先ず、だけだよ」

「少なくともここに居る人は、急に襲って来ないし言葉は通じるわ」

「……みたいですね」

グランは祭祀場の中を見渡す。歴史を感じるよりも先に寂しきを感じる遺跡、そこにあるのは五つの内四つが空席の玉座。広場から通じる通路先からは、鉄を打つ金槌の音。そして広場の階段に座る鎖帷子の兜の男。そしてアッシュと彼と向かい合う女性。寂しい場所に見合った人数と言って良いのか、あるいはむしろ多いと思えば良いのか。しかし如何にも自分達の存在がこの場で浮いている事をグランは分かっていた。

「しかしこの場所はなんなんだろうな……」

「また変な星晶獣が出て何かしたのかしら？」

「いえ、私達があの『色の無い霧』に飲まれた時、星晶獣の気配はありませんでした。ただそれ以上にもっと違う……」

ラカムもこの場所についてなにもわかっていない。イオは自分達の世界にいる『星晶獣』と言う神に等しい存在がなにか力を使いこのような状況を起こしたのかと考えた。彼女達は、これまでもその様な状況に遭い良くも悪くも慣れていたため、その可能性を考えた。

だがその星晶獣の気配を強く感じる事が出来る少女ルリアは、その可能性を否定した。彼女がここに迷い込む時に感じた気配は、星晶獣のものではなくもっと別の何か、だがそれを彼女はうまく口で説明する事は出来ない様だった。

「ところでラカム……グランサイファーは……」

「ああ、それなんだが……」

グランサイファー、グラン達が乗る空を飛ぶ騎空艇。飛竜を思わせるその姿は、グラ達の誇りでもある。だがその誇り高い騎空艇の姿は、祭祀場の外にも無く痕跡すらない。

「俺達がここに居るなら、とも思ってたんだが……どこ探しても見つかりやしねえ。いや、そもそも探すほどの場所がねえんだ。近くに不時着かしてりや絶対分かるはずだ。だがオイゲンと一緒に遺跡の辺りを見渡しても影も形もねえ」

「それじゃあグランサイファーは……」

「別のどこか、に落ちたって事になるな」

グランサイファーは、グラン達にとって空を渡る“足”でもある。ここに迷い込む直前まで間違いなく共に居たもう一人の仲間とも言えるその騎空艇が無い。グランは不安を感じたが、それを表に出さないように努めた。

「……少なくともグランサイファーもこの世界に来てはるはずです。なんとか探し出そう」

「勿論俺もそのつもりだ。グランサイファーを見捨てるなんて出来るわけがねえ。だが探そうってもの……」

右も左も分からない世界。ここが見知らぬ不思議な島なのか、それとも自分達の想像

もつかぬ異世界なのか、それすらもハッキリとしてない。そんな状況で果たしてグランサイファアを無事探す事が出来るのだろうか。

「まずは情報だな。そもそも俺達がどこに迷い込んだのかすらわからねえ。地道に行くしかねえさ」

流石年の功と言うべきか、オイゲンは誰よりも冷静だった。こんな状況下では、焦っても意味が無いと分かっているのだろう。

「やっぱりここって、私達の世界とは別の世界なのかしら……」

「まさかここが『星の島』とかじゃねえよなあ……それとも、空の底とかさ……」

「まさか、それは違うわ。……けど今ここから見える景色は何もかもが異質過ぎる。全貌は勿論一端すらつかめない、仮に異世界だとしても私は驚かないわ」

不安げなイオとビィの眩き、対してロゼツタは自身の見解を述べた。それについてグラン達は誰も否定はしなかった。異質、正しくそうだと誰もが思ったからだろう。

「……ここが異世界としてもオイゲンさんの言うとおりだ。まずは情報を集めよう」
「つととなると……」

「この場に居る面々から、となるな」

ラカムとカタリナは、祭祀場に居る面々を見た。誰一人として彼等に興味を示さず、かと言つて墓守のように排除しようともしない、それは徹底的な無関心であった。

グラン達はげんなりとした。自ら情報を集めるのは、騎空士として当たり前の事である。だがこの状況で奇妙な者達を相手に聞き込みをせざるえない事に早くも疲れていたのだった。

二 囚われ

■ ■
グラン達は一先ず手分けをして情報を集める事にした。祭祀場にいる自分達以外の人間、果たして友好的かは分からないが、ともかく話を聞くしかなかった。

アツシユと火防女を名乗る女性は、まだ話を続けていた。そのためグラン達は、他の者に話を聞く事とした。

「あの……すみません、少しお話を聞きたいんですが……」
「……」

グランはビィと共に、まず近くに居た階段に座り込む男に声をかけた。男は俯かせていた顔を上げると、二人をいぶかしみ睨む。

男は鎖帷子の兜以外は統一された防具を装備し、その背にはアツシユと同じバスタードソードを背負っている。そのため戦士か騎士かと思われるが、装備のわりに覇気もなぐただ無気力な男だった。

「ふん……灰でも不死でもない、ダークリングが無いとはな……どうやら、まともではあるようだ……」

「な、なんだよ急に」

「だが死に損ないの灰が、何を連れて来たかと思えば……小僧に喋るトカゲとはな……ハハ、ハハハ……！」

「むきいー！ オイラはトカゲじゃねえー！」

男は二人を嘲った。ビイは酷く憤慨したが、グランは男の態度に対し苛立ちよりも、なにか「哀れ」を感じた。それは、男が酷く自分達以上に疲れている、或いは——絶望しているように見えたからだろうか。

「だが言葉を交わせるのは重畳だ。今やそれだけでもまともな証であるからな……それで、俺のような挫けた半端者に何が聞きたいと？」

「実は——」

グランはこれまでの経緯を簡単に話した。その男は「ホークウッド」と名乗り、グランの話聞いていたが、全く奇妙な話と思ったようでたたいぶかしむばかりだ。

「空だ島だセイシヨウジューだ……わけのわからん事ばかりだ……やはりまともではないのか……？」

「嘘なんて言っつてねえからな！ こつちだつてわけわかんねえ事ばつかで混乱してん

だ」

「僕達の事は……信じられなくてもしかたないです、ただこの場所や僕達の探してる艇について聞ければと思つて……」

「……はあ」

ホークウッドは溜息をつくど、暫し考え面倒臭そうに口を開いた。

「グランサイファーとか言う艇は知らん。そもそも空を飛ぶ艇など信じられん。俺が話せるのは……精々この辺りの事程度だ……」

「それがかまいません！ 今は、少しでも情報が欲しい……」

「ふん……今更こんなつまらん話をする事になるとはな……それも何も知らん小僧とトカゲ相手に……」

「だからトカゲじゃねえつて!？」

早くグラン達にどこかに行つてほしいのだろう、ホークウッドはこの祭祀場や墓所について、そしてここから見える“城壁”について語り出した。

そして別に話を聞いているルリアとカタリナ、二人は空席ばかりの玉座にただ一人居る男の下へ行つた。大きな玉座に似つかわしくない小柄の男、玉座に座るよりも“置かれた”ようにいるその男は、黙つて広場でホークウッドと話すグラン達を見つめていた。

「もし、そこの方。良ければ話を伺いたいのだが」

「……ああ、かまわないよ」

カタリナが階段を上がり玉座の下手から声をかけた。男は穏やかな声で応え二人に顔をむけた。

「話し辛いだろうが、この場所から失礼するよ。あまり動く事の出来ない身でね……」

焼け焦げた煤の様な体、今にも壊れそうな小さな体を僅かに動かしカタリナ達へ視線を向ける男。その男自身には一切の敵意と言ったものを感じる事はなかった。だがルリアは、彼からその身には似合わぬ熱い火のような何かを感じた。

「ふむ……君は、私の火を感じたようだね」

「あ、えつと……」

「……灰でも無く、不死でもない。であるなら、迷い人か……不思議な子だ……」

男は不気味なその風貌に反し、落ち着きと優しさを感じる。

「失礼、名乗るのが遅れてしまったね。私は、クールラントのルドレス。君達には分からないかもしれないが……かつて火を継いだ、薪の王さ……さあ、何を聞きたいのかな？」
思ったよりも穏やかで友好的な王を名乗るルドレスなる人物。姿だけなら卑小にさえ見える男だが、確かに彼から王の気配をカタリナは感じたのだった。

一方でラカムとイオの二人は、広場から通じる通路に居る老婆に出会っていた。

「あー……婆さん、ちよつといいか?」

「私達色々聞きたいんだけど」

椅子に座る老婆に話しかける二人。すると老婆は顔を上げ二人を見た。埃と灰を被った赤頭巾、老婆らしいしわくちやの顔。だが老婆自身からは、その皺以上の年月を感じられた。

「これはこれは、珍しい事もあるものじゃ……不死ですらない、まともな迷い人とはの……」

「お、おう? いやよくわかんねえが……けど確かに迷子つちや迷子だな。色々話聞いてもいいか?」

「ええ、ええ……婆めは、この祭祀場の侍女。武器や防具、道具や魔法の類……必要な諸々を、用立てますのじや。しかし貴方様方は灰とは別の使命をお持ちのようじや……ならば今必要なのは、婆めの話程度でありましょう……さあ、聞きたい事を言ってみなされ。婆めが知っているならばお教えしましょう……アハ、アハハハ……」

「な、なんか不思議な人ね……物売ってるらしいし、よろず屋さんみたいな人かしら」
「まあポジションは同じ気がするけどよ……」

老婆までもが不思議な雰囲気と思わず一歩後ずさる二人。そんな二人からそう離れていないところでオイゲンとロゼッタの二人が、金槌を振るう立派な髭を生やす巨漢の

男に話しかけていた。

「なあ、あんた。ちょいと話聞いてもらってもいいかい？」

「あん？」

オイゲンが物怖じしない様子で声をかけると、男は金槌を振るのを止めた。男の周りには、剣や盾が並び手に持った金槌から如何にも鍛冶屋であるとわかる。

「ああ、さつきここに来た奴等か。新顔の灰とは別らしいが……おいおい、なんだ不死ですらねえのか。珍しい……何年ぶりだ……」

「不死……さつきからちらほら聞こえる言葉ね」

「ああん？ お前さんら不死を知らねえのか？」

男は髭を弄りながら二人を見てなにやら考えたが直ぐに「ウワツハツハツ！」と笑った。

「まあ俺がアレコレ考えても意味はねえ。まずあ名乗らせてもらうぜ。俺はこの祭祀場の従僕アンドレイ。見ての通り、武器を打つ鍛冶屋さ」

「ほう？ ここら辺のもあんたが？」

「ああ勿論、ここに来る奴の武器は、殆ど俺が面倒見てる。鍛えるのも直すのも全部な」
「へえ、良い腕してるぜ」

「まあ俺にはそれぐらいしか出来ねえからな。ウワツハツハツ……！ それで話か、灰

でも不死でもねえなら、さてこの鍛冶屋の俺に何を聞きてえんだ？」

心折れた男、王、侍女、鍛冶屋。まるでバラバラの者達から話を聞くグラン達。

性別、年齢、役目、能力。全てが不揃いな者達、それらが何故この祭祀場にいるのかグラン達は考えてはいない。だが一つ彼等に共通する事があるのなら、何れの者達も火に囚われていると言う事だ。燃え尽きようとする火に――。

■ 三 祭祀場での語り

――その一人は、心折れた騎士。絶望する事すら出来ない灰の一人。

「俺に語れることなんざ多かない、ここは火継ぎの祭祀場。死ねない不死と、火のない灰、死にぞこないのたまり場さ」

「そこに玉座が見えるだろう？　そこには、王が座るのさ。私を含め、火を継いだ薪の王がね」

「鐘の音、あれが灰を呼ぶのですじゃ……。呼ばれた王、玉座を捨てた王を呼び戻すため……」

「だが大抵の灰達は、あそこの『心折れ野郎』みたいになるか、帰って来なくなるのさ」

――もう一人は、火継ぎを成した者。追放者にして薪の王。

「王が何かかって？ 知ってどうする……不死でも灰でもねえお前さんらが……」

「王とは……火継ぎを成した者の事さ……私のようにね……」

「誰もが火継ぎを知り……だが誰も火の事など知りはしませんのじゃ……」

「それでも、誰かが継いで来たのさ。ずっとずっと昔からな……」

——また一人は、「灰を幾人も見てきた老婆。その瞳には、灰の絶望がのぞく。

「俺は何もしないのかって？ 何も知らぬ生者がよ……相手は火を継いだ英雄様だぜ。

俺に何ができるものかよ……」

「火の途絶えようとする今、嘗ての薪の王は呼ばれしかし玉座を拒み姿を消した……」

「今この世は淀みの世界……みんな迷っておるのですじゃ……。灯となる火が途絶えよ

うとする……淀んだ世界で……」

「だが迷ったとして、どんな世界でも、結局人は自分の出来る事しかできねえ。俺がずつ

と武器を打ってるみてえにな」

——そしてまた一人は、祭祀場の従僕。灰の武器を打つ者。

「後の事は知らねえ、勝手にすればいい……。どうしてもなら、一緒に来た死にぞこない

に聞きな……」

「動けぬ身では、今はそう力にもなれない。あの灰……彼なら、力になるだろう……。

頼ってみなさい……」

「この老婆めでは、これ以上お客人の力にはなれますまい……あの灰の方なら、お客人達の道を僅かでも照らすやもしれませぬ……」

「生憎俺は、武器打つぐらいしか能がねえ。だからあそこの灰の野郎、あいつにも色々聞いてみるよ。あの灰、心折れ野郎とは違いそうだしな……」

だがどの瞳も、一人の灰を見ていた。

「俺はもういい……足掻いたところで所詮俺は、死にぞこないなのさ……お前達も、ここに来たなら遅かれ早かれわかる……ハ、ハハハ……!」

「迷い人、蒼い髪のお嬢さん……こんな淀んだ世界でも、きつと君達は呼ばれたんだろう……今はただ進むといい……灰と共に……」

「氣を付けなされ、憐れなお客人……進むのならば、止まらぬことですじゃ……挫け止まれば狂う、そんな世界ではなおさら……アハ、ハハハ……アハハハ……!」

「あんた達がただの迷子か、それ以外なのか……どっちにしたって俺は、ここで武器を打つだけさ。だがどんな道だつて進んでこそだぜ……迷子なりに進めば案外見えるもんさ、道筋つてやつがよ……なに従僕の戯言さ、ウワツハツハツハ……!」

その瞳は、一人の灰に希望と絶望、どちらを見たのか。本人達も知る事はない――。

四 異世界

「……みんな、何かわかった？」

「わかったんだか、わからんのだかだ」

再び集まったグラン達。みなこの祭祀場の住人から話を聞いて戻ってきたがその表情は暗く、グランの言葉にも疲れた様子でラカムが答えた。

「とりあえず陰気で、滅びる寸前の世界ってのは分かった」

「それに星晶獣とかそういう話は、まったく知られてないようだ」

「海や山で国が離れているとしても、この世界は地続きになってる。空に島は浮いてねえとよ」

「つまりは、完全に異世界って事ね……」

「絶望的って感じよね。色々」と

イオの「絶望的」という言葉が重くのしかかる。

「灰だとか不死だとかわからねえ事が多すぎる。ばあさん達の話じゃどうも要領をえねえ。異世界で納得、むしろそれ以外あるのかって感じた」

祭祀場の階段に座り込みながら頬杖をついたラカムは、大きいため息を吐いた。そして吐いた息で灰やら埃やらまで舞い上がり酷くせき込んだ。

「……鐘の音が灰を呼ぶ、私が聞いた鐘の音はそれなのかもしれません」

ラカムとイオが老婆から聞いた「鐘の音」の話。この世界の来る直前。色の無い霧に飲まれる時、グランサイファーの上でルリアは確かに鐘の音を聞いた。

「だとして灰つてのはなんだ？ グラン達と来たアツシュって奴と、あっちのホークウッドって男がそうらしいけどよ……」

「あと戻るにしてもグランサイファーだ。だがそれをどう探すか……ざつと建物の周りを見てみたんだが、これがまた厄介だ。お前さん方が来たって言うところ以外道らしい道なんてありやしねえ」

「誰が呼んだか知らないけど、戻り方も教えなさいよって感じね。こんなところ来ちゃつて、グランサイファーも無いし私達どうすればいいのかしら……」

オイゲンの言うように、この一帯はほとんど孤立した場所だった。グランサイファーを探しに行こうにも、探しに向かうべき道がないのだ。今度はグランもイオもため息を吐いた。

「ルドレス殿が言うには、『灰の彼』に力を借りろ……と言うが」

「それつてつまり、アツシュの事だろ？ 素直に協力してくれる感じじゃねえけどなあ」

「うーむ……」

「それとも単に面倒で投げたんじゃないやねえだろうな……」

「そう言った感じではなかったがな」

ホークウッドに対し良い印象の無いビイは、面倒で胡麻化されたのではないかと彼の言葉を訝しんでいるが、カタリナの方はルドレスに対してそんな印象を受けてはいないようだった。

「どのみち話は聞いてみないと……あれ？」

グランがアツシユと火防女がいた方を見るが何時の間にか彼の姿が消えていた。代わりに火防女が一人佇んでいる。

「アツシユさん？ どこに……」

「我々が話を聞いている間に移動したのか？ まさか外へ……」

「おいおい、そりゃ困るぜ。まだあの兄さんにや話聞きたいんだぞ」

先にごどこかに行つてしまったのか——カタリナもラカムも冷や汗を流し焦った様子をみせる。

「えっと、アツシユさんがお話ししてた女の人に聞いてみましょう！ どこに行つたかしててるかもしれないません！」

「確かにそうだね……」

祭祀場に居る殆どの人間がアツシユを頼れと言った。こうなると元の場所へ帰る手掛かり一つ無いグラン達にとってアツシユはある種生命線だった。

慌てて火防女のそばへ行きルリアがアツシユのことを聞いた。

「あ、あのお姉さん！」

「……」

火防女は、静かに顔をルリアに向けた。

「……はい、何用でしょうか」

「えっと、アツシユさんはどこに」

「灰の方……あの方は、先程外に行かれました」

「うええ!?! ど、どうするグラン! 急いで追いかけるか!?!」

あたふた慌てたビーであるが、火防女は静かに続ける。

「……用事を済ませると、そう言われてました」

「へ? じゃ、じゃあ戻ってくるのか?」

「少しすれば」

「そ、そうなのか……」

思わず一同ホッと息を吐いた。

「ふい……あんな感じの奴だし、フラと消えたかと思っただぜ。ありがとな、目隠しの姉ちゃん」

「……いいえ、かまいません」

目隠しの姉ちゃん——ビーにそう言われた火防女は、一瞬間を伏せるようなしぐさを

見せた。果たしてそれは、微笑であつたのか。

そして火防女はグランを見る。だがグランは不思議と彼女の視線を感じなかつた。——それは彼女の視線が頭冠で隠れているからか？ 果たして——だがあるいは、見られるのではなく、己の内を覗き込まれるような感覚を覚える。

「あなたは、少し灰の方と似ていますね」

「え？」

「その身には、一度死が訪れている……」

ドキリと、グランとルリアの心臓が跳ね上がった。

「わ、わかるんですか……？」

「『魂』が死を覚えています」

「魂が……死を覚えて……」

「魂は、ソウルとは記憶……それは忘れても消える事はありません」

火防女は次にルリアに顔を向ける。

（この人は、なんでだろう……私と、似てる？）

——蒼の少女は、黒衣の火防女に何を見たか。この時では到底分らぬことであつた。

「……そうだ。彼を待つ間あなたにも話を聞いてもいいだろうか？」

ここでカタリナは、不思議な目の前の火防女に話しかける。彼女からは、まだ話を聞

いていなかったからだ。

「……私でよろしければ、何なりと」

「それは助かる。そう言えばまだちゃんと言乗っていないかったか。私は——」
「存じています」

カタリナが名を告げるより先に火防女は答える。

「先ほど、灰の方からお聞きしました。迷い人の方々」

「いつの間に……」

「そこはしつかりしてるな……」

ぶつきらぼうに思えたアツシユのママな所を感じ意外そうなビイとラカム。

「ではそちらの名を聞いても？」

カタリナが火防女に名を訪ねると彼女は小さく首を振った。

「私は火防女。篝火を保ち、灰の方に仕える者です。単に、火防女とお呼びください」

「それは……」

皆顔を見合した。普通じゃない事ばかりだが、これもまた普通ではない。名を告げられぬ女、火防女と言う明らかに役職を名とする者。

だが誰も「なぜ？」と言えない。あるいはここが空の世界なら、言ったかもしれない。だがここは異世界、今安易にそれを聞く事は憚られた。

「……わかった。では改めて火防女殿、あなたからも色々とお聞きしたい。この世界の事を」

「かまいません、ですが私の語りは灰の方への助け、それが迷い人の方々の助けになるかはわかりません」

「それでもいい。少しでも情報が得れるなら」

「……わかりました。ではお聞きください。答えられる事ならば、私は語りましょう」

火防女は、静かに頭をたれた。

「僕達を知りたいのは……この世界のこと。帰る手段を、グランサイファーを探すためにきつとこの世界の事を知らないといけない」

「滅びそうな世界で、皆共通して……火、灰、不死、亡者……その様な言葉を使う。これは一体なんなのだろうか？」

「……お答えします」

グランとカタリナの言葉を聞いた火防女は、数度軽く頷き口を開く。

「不死……そして灰。これらは火が陰り生まれ、呼ばれる者たち」

「火が陰ると……生まれる？」

「そう、今世界は火が陰り絶えようとしています……それにより、人々はいつしか不死者となる。死を失った者達は、生者のソウルを求め彷徨い……何時しか亡者と果てます」

「ま、ますますわかんねえな」

火防女の言葉にカタリナもラカムも首をひねった。

「不死とかは言葉の響きで何となくわかるが……じゃあ火つてのはなんだ？　なんで火が陰るとそれが出てくるんだ？」

「それは——」

火防女が続けて話そうとしたが、ふいに視線をそらした。

「……戻られたようです」

釣られグラン等もその方向を向くと、祭祀場に帰ってきたアツシユの姿があった。

「あ、帰ってきた」

イオがアツシユを指差した。彼らに見られていたアツシユはその視線に気が付きズカズカとグラン達へと近づいて来る。

「人を指さして何の用だろうな」

「あ、ごめんなさい……って、うえ!？」

イオは思わず悲鳴を上げた。近づいてきたアツシユの体が血塗れになっていたからだ。

「ア、アツシユさん怪我を!？」

「違う、返り血だ」

ルリアが心配そうに聞いたが、アツシユは鎧についたものは全て返り血であると言ひ意に介していない様子だった。

「返り血って、あんた何かと戦ってきたのか？」

「墓守どもと少しな……」

「あ、あいつらまだいんのか!？」

今度はラカムが驚きの声を上げた。

「俺らも逃げながら結構倒したと思つたんだけどな……」

「倒していなくなるような奴らではない。時間が経てばまた立ち上がる」

「なっ!? マジで死なねえのかよあれって……!？」

更に驚くラカム。ここの住人との会話で「まさか」とは思つていたグラン達も目を見開き声こそ上げないが驚いていた。一方アツシユはそんな彼らを見て笑っている。

「クク……ッ! この世界で不死だ亡者に驚くような暇などあるか。そんな事では明日には貴様らが亡者にでもなるぞ」

「不死に亡者ね……ここは地獄か何かか？」

「全くだな……ク、ククク……ッ! 地獄だよ、ここはな……」

ラカムの冗談は、皮肉もあつた笑えぬものであつたが、アツシユはそれを聞き掠れた笑い声を喉から響かせる。

「お帰りなさい、灰の方」

そして静かに立っていた火防女が、アツシユに声をかけた。すると彼は短く「ん」ただ言葉になっていない唸るような返事を返す。

「そっけねー返事だなあ」

「黙れトカゲ」

「だからオイラは、トカゲじゃねえ！」

「……それで貴様ら、コソコソあちこち話を聞いて収穫はあつたか？」

「いや、それは……」

ビィを無視してグランに話しかけるアツシユだが、グランの返事は覇気のないものだ。

結局大した情報は集まらなかった。特にグランサイファーに関しては、皆無と言っていい。落胆した様子のグラン達だが、アツシユは予想通りといった様子で「ククク……ッ！」としやがれた笑い声を兜から漏らす。思わずビィが憤慨した。

「な、なんだよう！ 笑うこた無いじゃんか！」

「クク……悪いな。まあそうだろうと思っていたさ……こんな灰と埃くさい場所で得られる情報で、貴様らが欲しいものなどあるまい」

「うぐぐ……」

小馬鹿にしたアツシユの態度に、ビイは顔をしかめた。

「それで皆さん……アツシユさんを頼ってみると」

「なに……？」

だがグランの言葉を聞くと、今度はアツシユが顔をしかめた。もつとも兜で顔は見えないが、その表情が決して良いものではないのは、グラン達も雰囲気でも容易に分かった。彼は周りにいる人間、特にルドレスを睨んだ。当のルドレスは、玉座で思索するように黙つたままだつた。

「……チツ！」

「露骨な舌打ちだなオイ……」

ビイが呆れる程アツシユは、舌打ちを隠そうとせず大きく鳴らした。

「灰の俺が、迷い人の世話か……」

「すみません……けれど、この世界で頼れるのは、今貴方だけなんです」

「頼られた所で何をしろと言うんだか……俺には、俺の目的がある。貴様達のために寄道をする暇も義理もない」

「……そうですか」

やはり駄目か——アツシユの言葉を聞き、グランはそう思った。

「だが、この地にいる以上……お互いどこに向かおうといずれ道は重なる」

しかし不意にアツシユの雰囲気が変わる。

「……その女達は戦えるのか？」

「え……？」

「全員戦えるのかと聞いてるんだ」

それは苛立ちを含みながらも突き放すような言葉ではなかった。

「は、はい！ みんな頼れる仲間です！」

「……おい小娘、お前は杖を持つが魔術使いか……？」

「魔術使いじゃなくて魔法使い、当然使えるわよ！ あと小娘って呼ばないで、私はイオって言うの！」

「騎空士の事はわからないかも知れねえが、俺達もそれなりに修羅場潜ってるんだ。こいつも女子供と侮らねえ方がいいぜ」

「子供じゃないもん、レディだもん！」

「へいへい」

「……」

ラカムの言葉を聞いたアツシユは、グラン達面々を改めて、一人一人品定めするよう
に見ていった。

「……この地は混沌として、だがどう進もうと『行く先』は限られるだろう。そこに貴

様達の言う艇があるのか、それとも帰るための手段があるのかは知らん。だが俺はそこを指す」

「それって……!」

「勘違いするな。助ける気などない。お前達のために寄道はせん、墓所とここまでの道と同じ……来たいなら、勝手について来ればいい」

「それでも助かります……本当に!」

「ふん……だが来る以上俺も手を貸してもらうぞ。なんせ“外”は墓守だけではないからな……戦えるのだろうか?」

「勿論です!」

目指す先もグランサイファアの行方も分からない中、たとえどんな形でもその場所を知る人間に同行できるのは、グラン達にとってはありがたかった。

■ 五 旅立ち

■ グラン達の同行を許可したアッシュは、返り血も乾かぬうちに何処からか歪んだ螺旋の剣を取り出した。

「それは?」

「朽ちた英雄、それが鞘となり残したものだ」

「……もしかして、さっきの？」

グランは、戦った巨漢のいる場所にアツシユが入る前「誇り臭い英雄」と言っていたのを思い出した。

「そうだ」

アツシユは螺旋の剣をじつと見つめ、そしてふいに――。

「……………ふっ！」

祭祀場の中心、灰の溜まる消えた篝火跡へ突き刺した。すると徐々に消えたはずの篝火が灯り、剣を覆うように燃え上がる。

「これは……………」

「螺旋の剣は、これで力を取り戻した。鞘となつた英雄の使命は、これで果たされたと言つていい」

グランもここまでの道で見た篝火、それに酷似する祭祀所の篝火。これらの火を見てグランは、なにか強い繋がりを感じた。

「わかるか？ 火と火の繋がりが」

「え？」

そんな彼の考えを察したのか、アツシユが話しかける。

「篝火とは、この剣により繋がるもの。そして不死と灰達の身を癒し、見送るものだ」
「普通の火にしか見えないけど……」

何やら特別なように語るアツシュだが、イオには剣以外は普通に燃え上がる火にしか見えない。

「不死でもなければそうわかるまいよ。……ああそうか、グラン。お前……過去に一度死んだのだな？」

「またも『ドキリッ！』と、グランとルリアは、心臓が跳ね上がるような気がした。」

「あなたもわかるんですか……？」

「火防女さんにも、さつき同じことを……」

「ああ、なるほど。火防女……あいつなら直ぐにわかる。視えたのだろう、お前の死を覚えたソウルが」

火防女同様不思議な言葉を並べるアツシュ。だが二人はその言葉が妙に重く感じる。

「しかし不死でもないか、奇妙な小僧だ。だが、それなら……うむ、あるいはやれるか」
アツシュはグランを見て独り言を言いながら数度頷き、彼を手招きした。

「な、なにか？」

「篝火に手をかざしてみろ」

「え？」

「手をかぎすんだ」

急な注文であった。手をかぎせ？ それに一体何の意味が？——グランは首をかしげるが、彼に付いていくと決めた以上大人しく言うことを聞くことにする。

すると——。

「うっ!？」

急にグランの脳内に見慣れない場所の景色が浮かび上がった。

「な、なんだこれは……!？」

「グ、グラン大丈夫ですか!？」

「や、やいやいや!？ グランに何しやがったんだよお!」

「心配するなトカゲ。奴は今は、見てるだけだ」

「み、見てる?」

「そうだ……見えるな、グラン」

「み、見えますけど……これ、なんですか?」

まるで「空図の欠片」で新たな航路、行くべき島が見えるような感覚。それと同様のものを彼は体験していた。

「まず行くべき場所だ。そこに行かねばどうしようもない」

「行くべき場所……けど、どうやって行くんですか?」

「簡単だ。その景色が見えるなら『転送』される」

「え、転送?」

「ああ……おい、お前たちも集まれ」

碌な説明もないままアツシユはカタリナ達も近づくよう手招きをした。皆不安そうに顔を見合わせた。手招きに応えグランのそばによる。

「おい、転送つて聞こえたがここから移動するのか?」

オイゲンが疑うように聞くがアツシユはさも当然と言うように「うむ」と答えた。

「篝火とはそう言うものだ。グラン、見える光景を強く念じる。行き先は——『ロスリックの高壁』だ」

「ロスリックの高壁……っ!」

グランは、アツシユに言われた行き先を唱える。すると次の瞬間、彼らの周りに霧がかかる。

「ちよ、ちよつと何よこれ!」

「動くな、大人数の転送は初めてだ。離れるとどうなるかわからんぞ」

「はあっ!?! おめえそういう重要な事は先に——」

アツシユの発言に驚いたビィの叫び。だがその叫びは、言い切る事もなく途切れ、彼らもその場から霧と共に消え去った——。

「ご武運を、灰の方、そして迷い人達——あなた方に炎の導きのあらんことを……」

灰、迷い人達。彼らを見送った火防女の言葉は、篝火の炎へとくべられ静寂の中へ消えていった——。

阻む高壁

I High Wall of Lotheric

「——おめえそういう重要な事さきに言え……つて!？」

突如としてある薄暗い室内でビィの声が響いた。

「……ど、どこっ!？」

彼だけでなく、仲間一同突然変わった景色に驚いている。ただ一人アツシユは、ビィ達の驚く様子を見て愉快そうにしゃがれた笑い声をあげた。

「ク、ククク……ッ! “転送”だ。そう言つたらう」

「転送だ……じゃないわよ!?! ちゃんと説明しなさいよっ!?!」

「悪かつたな……ククッ。説明は、どうも苦手でな。さあ、もう離れて構わん」

イオの文句も聞き流しアツシユはグラン達から離れた。皆も解せない様子であったが、それよりも今自分達がいる場所のほうに気がなった。

狭い部屋、それも薄暗く誇り臭い場所で窓も木板で閉じられており、僅かに光が入る程度。天井は高いがそれだけ、ただ何も無い部屋だった。

「それで……アツシユさん？　ここはどこかしら？」

ロゼツタがアツシユへ質問するが、彼は構わずスタスタと歩いて部屋唯一の扉にまで行ってしまう。

「……ついて来いって事だな」

「説明が苦手ってか、面倒なだけじゃねえか……？」

「と、とりあえずついてきましょう」

オイゲンとラカムが呆れた様子でアツシユの後姿を見た。しかし初めからアツシユは、助ける気はないと言っていた。グランは困った様子でアツシユの元へと近づいた。

アツシユが立つ前にあるのは、彼の身の丈以上ある木製ながら重厚そうな扉だった。

「さて行くこうじゃないか……」

アツシユはグラン達が付いてくるのを確認すると、その扉に両手を押し当て力を込めた。すると扉は音を上げ開きだす。長い時間開けられた事が無いのか、扉と壁の間からは、大量の埃が舞った。

「えほ!?　えほ……!　ほ、埃が」

「あーもおう!?　埃まみれになっちゃやうじゃないのお!　……けほっ!」

マスクどころか兜も無いルリアやイオ達は、思わずせき込み手で埃を払った。その間に扉は、アツシユの手で完全に開ききった。

開いた扉、その先に見える光景。それを見たグラン達は――。

「()は……」

「大きなお城が……」

ただただ息を飲んだ。巨大な城とそれに橋で繋がる巨大な建物。多くの島々で城を見てきたグラン達だが、ここまでの物を見るのは中々無い。

景色の全貌をより見るためグラン達は、扉からゆつくりと外に出てやっと自分達が高い場所に居る事を知り、そして改めて異様な場所へ居る事を知った。

空の世界では、仮に「大きな島」と思われても宙に浮く島で人の住める土地は、どうしても限られる。そして自分達が今居るような高い建物にいたら大抵島の――つまりは、大地の端が見えるものだ。だがここにそんなものはない。大地の端はなく何処までも続いている。それこそが空の世界とは、まったく違うのだと建築物は物語っている。

「転送って……本当に移動したのね」

「信じられんがそうらしいな」

火継ぎの祭祀所から一瞬で移動した事実にもまたイオとカタリナが驚きを隠せないでいた。

「しかし……随分と辛気くせえじゃねえか」

「ほんとだぜ、建物は立派だつてのによろ」

遠くに見える城は、その姿こそ荘厳なものであった。だがあまりにもこの世界は、
死に掛けている」。

ラカムの言うことにビイは頷き、城と周りの建物に反して不気味な辺りの霧囲気に顔をしかめている。ここで感じる嫌な霧囲気は、景色が変われどあの灰の墓所とそう変わりないのだ。

「アツシユさん、ここが……転送前に言っていた」

「そうだ」

アツシユは真つ直ぐに遠くの城、その一点を見ながらグランに答えた。

「ここがロスリック——ロスリックの高壁だ」

「ロスリック……」

初めて聞き、初めて見る「大地」の上に立つ国。その国からは、滅びと絶望の気配が
グランを誘うかのようだった。

II 篝火「ロスリックの高壁」

ロスリックの高壁と呼ばれる場所、その一面に転送されたグラン達は、異様な光景の前に驚きながらアツシユの後についていく。

彼は転送後に出た部屋から出ていくと、外にある階段を降りてすぐの広い踊り場のような場所へ移る。そしてそこには――。

「あ！ これ、もしかして」

ルリアが声を上げ指さす先には、この世界でもう四度目となる篝火があつた。

「そう、篝火だ」

「どこにでもあるなあ、これ」

「古から不死に溢れた世界だ。どこにでもこれはある」

B・ビィに相槌を打ちながらアツシユは、その燻る篝火に手をかざす。すると彼に灯されるのを待っていたかのように、篝火は明るく火を灯し燃え上がった。

「これで『繋がった』」

「え？」

「言つただろう……火は、篝火は繋がっていると。故に転送と言う手段がある」

アツシユは一步下がり、グランに対し「手をかざしてみろ」と言う。グランは恐る恐る火継ぎの祭祀場の時と同じように篝火に手をかざしてみる。

「ああ……！ ま、また場所が!! み、見える……!」

すると彼の意識に幾つかの景色が浮かんだ。灰の墓所、あの巨漢の広場、そして祭壇。どの場所にも篝火があり、その全てが一度行ったことのある場所だった。

「やはりこの篝火も使えるのだな……面白い小僧だ」

「そ、それよりこれどうすれば……!?!」

「意識をそらせば消える。そうすればただの篝火だ」

「意識を……あ、あれ……? き、消えた……?」

アツシユの言う通り転送先の場所から意識をそらすと頭に浮かぶ景色が消えていく。グランはホッと息をついたが、はたから見ると篝火に手をかざして慌てるだけにしか見えなかった。

「奇妙な篝火だなほんと……」

「だが必要なものだ。これが無ければ真面にこの世界を渡り歩くなどできんよ」

離れた場所を繋ぎ転送を可能とする篝火。不死の骨を燃やし螺旋の剣突き刺さるそれは、ビー達にとつてやはりどこか不気味だ。

「そんで? こっからどうすんだ」

「どうするもない」

ラカムの問いにアツシユそつげなく答えながら、今いる場所から左手を指さした。

「進む、ひたすらにな」

「進むってお前……どこに？」

「行くべき場所までだ」

アツシユは答えになつていない答えを言いつつ歩み始める。グラン達は慌てて追いかけた。

「ちよ、ちよつとアツシユさん!？」

「もう剣は抜いておけ。しばらく休めんど」

「ちよつと!？」

「人の話聞かねえ奴だな……」

「いいから来いってことだろ。俺達も行くぞ」

ここに来て早々疲れた様子のラカム。オイゲンは、諦めたのか既に武器を取り出し使えるようにしてた。

彼らは転送された場所から階段を少し降りる。するとまた別の塔に続く通路に出るがそこには――。

「げえ……」

ビイがうんざりとした声を出した。彼らの視線の先には、何人もの痩せこけた人間が膝まづき、そして唸るような低い声で何かへと祈りを捧げていたのだ。他にも壁に頭を押し付けていたり、茫然と立っているだけの者などがある。

「どこもかしこも、亡者ばかりだろう。こんな光景が世界中に広がっている」
「世も末だぜ……」

「そうさ、末も末……終わる世界だよ」

オイゲンの言葉にアツシユは同意した。彼には見えているし知っていた。まさにこの世界が消える寸前の灯のような世界だと。

「とにかくついて来い、それなりに複雑だからな。はぐれても俺は知らん」

「やつと、ついて来い」 って言葉にしたと思えばコレだよ」

「あなた愛想がないって言われない？」

「そんなもの、この世界には必要ないな」

ビィとイオに呆れられてもアツシユに気にした様子はない。もつとも素顔をボロ布のフードと暗い兜で隠す男に愛想など求めるのが間違いだであろうと言える。

「しかしこの者達……亡者だったか、こちらに気が付いてないのか？」

「思考する力など失った者共だ。気付かなければ永遠に気付かんよ」

かなり近くに来たというのに自分達を見もしない亡者に気味の悪さを感じるカタリナ。アツシユの言うように考える機能がないように思えた。

「とはいえ、気付かれれば面倒になる。この先に——」

「なら早く抜けちまおうぜ、気味が悪いからよう」

者がグラン達の“命”を狙って迫った。

「まだ少ない方だ。蹴散らしながら進むぞ」

「は、はい!!」

心の準備もなく始まった戦闘。グラン達は、とにかくアツシユの後に続き亡者達へと立ち向かった――。

III 苦難の高壁

見知らぬ世界、見知らぬ土地の更に異様な場所。グラン達は、ここでの道のりに関して完全にアツシユに任せるほかなかった。ゆえにどんどん進んでいくアツシユの後を必死に追った。彼らには、アツシユがどんな場所を進んでも文句を言う暇もないのである。

そもそもがアツシユ達この世界の住人が言う“亡者”にあふれた高壁の道中。ただ進むだけでもかなりの困難であった。

「おいおいおいおいおいっ!? ここ通れつてのかあっ!?」

脅威を前にしてラカムが叫ぶ。最初の亡者が群れる場所をなんとか突破したグラン達であったが安心する間もなく彼らの目の前には、巨大な飛竜が空から現れ高壁の塔に

降り立つ。飛竜はその場所から眼下のグラン達目掛け強烈な炎のプレスで行き先をふさいだ。

「ここ、ここちの道の方が安全じゃないですか!？」

グラン達の前には、直進する通路と階段で上がりより飛竜に近づくと分かれ道があった。グランは、直進して飛竜の脇を抜ける方を進むよう進言したがアツシユはズカズカと階段の方に進んでいった。

「どちらに進もうと奴のプレスは届く。火だるまになりたくなければ駆け抜けろ」

「無茶言うなよ!？」

「焼きトカゲになっても知らんぞ」

「だからトカゲじゃねえ!!」

グラン達とて巨大な飛竜のような存在と戦った事はある。なんであればそれ以上に強大な存在とも。だが今彼らの目の前にいるのは、自分達を知るそれとはまた違う世界の異質な存在、その強烈なプレスが脅威にならぬわけではない。少なくとも、頭上からのプレスにまともに当たるとは当てるわけにはいかなかった。

だがアツシユの方は、なんら変わらぬ様子で道中も亡者をバスタードソードで切り払い、飛竜が炎のプレスを吐く合間を縫って駆け抜けなんとかグラン達もそれに続く。

そして飛竜のプレスを潜り抜け塔の中。飛竜の攻撃も建物の中までならばそうは届

かない。外では飛竜のプレスに焼かれる亡者の叫びが聞こえグラン達は、そのおぞましい声と惨状に顔をしかめた。

「飛竜に敵も味方も無い。通るもの全てを焼き尽くす」

「なんなんですか、あの飛竜……」

「高壁の番人と言ったところか……今更、何を護るといふんだか」

「おい、グラン。見てみろよ！」

アツシユのしゃがれた笑い声に続けて、ビイの少し興奮した声がある。いつの間にかビイは、この塔内の一つ下へ降りておりその階（丁度グラン達の足場の下）でポツンと置かれた『宝箱』を見つけていたのだ。

「如何にもな『宝箱』だぜ！」

「——ッ!? トカゲ、『ソイツ』から離れろ!!」

「あん? 急に何言つて……」

アツシユの叫びを聞いたビイは、先ほどの自分の失態を思い出した。そして同時に感じたのは、『宝箱』がある背後からの『視線』。

「——Kuurooro」

独特なうなり声をあげ『宝箱だったもの』の内部から異様に長い腕が伸びそのままビイをつかもうとした。

「ビイツ!?!」

「ビイさんうしろおーっ!?!」

「へ? ……うっひやああああっ!?!」

不気味な手がビイに伸びる。だがそれが届くよりも先にビイと怪物を遮るように割り込む影。

「カアア……ッ!!」

「K u u ……!?!」

アツシユだった。彼はビイと怪物の居る場所より上から飛び込み怪物の腕を両断しようとはバスタードソードを叩きつけるように振り下ろした。

怪物は、頭上から飛び降りるアツシユに気が付いたのか、ビイに伸ばしていた腕をすぐに引き戻した。だが不意打ちのアツシユの攻撃を避けきれず、両断こそされなかったが深い切り傷をうける。怪物は悲鳴を上げ痛みを紛らわすように腕を振り回した。

「下がれ馬鹿者め」

「わ、わりい……助かったぜ」

「ビイさん大丈夫ですか!?!」

ビイは大人しく後ろに下がる。そして慌ててグラン達も下に降りて来た。

「アツシユさんこいつは!?!」

「『貪欲者』だ。宝箱に擬態して宝につられたマヌケを食らう」
「K u a a ……!!」

(宝箱に擬態………僕の知ってるミミックとはかなり違う!?)

宝箱をした『顔』、あるいは『口』。その部分でグラン達を睨んだ貪欲者は、捕食の邪魔をされた怒りでうなり声をあげアツシユ達に向かい蹴りを放った。

「きゃあつ!? こつち来たあ!？」

「させないわよっ!」

貪欲者の蹴りがイオへと迫る。だがその足が彼女に当たるより前にイオの傍にいたロゼッタが足元より魔力の蔓を生み出し貪欲者の体を縛り上げた。

「K u a !？」

「あ、ありがとうロゼッタ」

「どういたしまして」

貪欲者は、そのまま蔓で動きを封じられ呻き声をあげる。それを見てアツシユは、ロゼッタの力に感心したようだった。

ロゼッタの力は、星晶獣によるものであるがこの世界の事をグラン達が知らぬようにアツシユもまた星晶獣については、まだよくわかってはいないのだ。

「貴様、面白い事が出来るものだ」

「ふふ、どうもありがとう」

「魔術、いや……その類か？」

「さてどうかしら……あら？」

貪欲者に対し力を籠めていたロゼッタだが、不意に手応えの無さを感じた。変に思い貪欲者の方を見てみればなんと貪欲者は、その身体を再度「宝箱」の方へと折り畳み蔓の拘束を抜け出したのだ。

「あつちも随分器用な真似してくれるわね」

「あの宝箱なに身体を仕舞うのが得意な輩だからな。多少の拘束は抜け出せるだろう」

「呑気にしてる場合じゃねえって!!」

ラカムが銃を構え貪欲者に照準を合わせる。貪欲者は、畳み込んだ身体をまた伸ばし彼らに襲い掛かろうとしていた。

「はあ……奴の体術には、十分注意しろ。それと絶対つかまるな。つかまれば頭から食われて終いだ」

「き、気を付けますっ!!」

「KuOaaa!!」

人数で勝るグラン達であったが、見た目に似合わぬ異様に巧みな体術で戦う貪欲者に対して、狭い室内と言う事もあり苦戦を強いられた。

だがこの貪欲者に慣れているらしいアツシユの助言もあり、なんとかこれを撃破することに成功する。

「Woo……」

「た、倒した……」

霞のように消えていく貪欲者を見て息を切らしながらホツと胸を撫でるグラン達。するとアツシユがノシノシとビィの方へと早歩きで迫った。

「……おい」

「う……っ!？」

「貴様は宙に浮いてよくものが見えよう。興味を惹かれつい近づきたくもなろうさ。気持ちはわかってやる。だがさつきといい、見知らぬ土地で一人先行なぞするな……っ!!」

宝だろうと迂闊に触れようとするんじゃない……っ!!」

「うぐ、ぐうぐ……」

人差し指をビィの腹に若干押し付けながら静かに、それでいて凄みのある声を兜の中から響くように出すアツシユ。

ビィも自分の二度目の失態を理解しており、酷くしよげてしまった。

グラン達もビィを庇いたところだが、流石に今迂闊に「ビィは悪くない」といった事を言うわけにいかず、ハラハラとアツシユの様子を見守る。

「わ、悪かったよう……オイラ……」

「……ここは、どんな者でも油断すれば死ぬ。強かろうが慣れてようが死ぬ時は死ぬ。忘れるな……仮に人語を解したとて、危険なモノばかりなのだからな」

言うべき事を言ったのかアツシユは、一度深く息を吐きそしてグラン達の方へ向き直った。

「トカゲだけではないぞ、お前らも迂闊な真似は止すことだ。貪欲者^{あいつ}だけが脅威と思ふなよ。ここでは、不意打ちを卑怯と言う事さえ許されんのだ……」

「……はい」

アツシユの言葉は、単なる脅しとは言えない実感のこもったものだった。彼もまた多くの困難を正に身をもって体験したのだろうと言う事がグラン達はよく分かった。

「……グラン、俺と違う貴様らは『やりなおし』がきかんだらう。精々気を引き締め直せ」

「『やりなおし』……？ アツシユさん、それってどう言う……」

「そのうちわかる。わからんならそれに越したことはない。行くぞ」

意味深な事を言いながらアツシユは、そのまま移動を再開し室内の梯子を上り始めた。そのあまりの切り替えの早さにグラン達は、ポカンと上るアツシユを見上げた。

「めちやくちや怒ってたのに急にクール……っつーかドライだな」

「切り替えが早い奴は、生き残れるもんだ。自然とそうなったんだろうな」

「ビイさん、あんまり落ち込まないで……」

「そうだビイ君。次から気を付けなければいいさ」

「うん……ありがとな二人とも……」

呆れるラカムに感心するオイゲン。そしてビイはルリアとカタカナに慰められていた。

一方でグランは……。

（「やりなおし」……それって）

アツシユの言う「やりなおし」、その事がグランは妙にひっかかった。その意味は、アツシユはそのうちわかると言った。だがわからなければいいとも……。

「わからんならそれに越したことはない」——グランは、そうであつて欲しいとなぜか強く思った。

「……ちなみによく。宝箱と貪欲者の見分け方ってあるのか？」

「なくはないが、手っ取り早いのは一度殴ればいい」

「乱暴っ!!」

■ なんとなく聞いた質問の答えに、どこか納得のいかないビイだった。

IV 塔へ

貪欲者の塔から出たグラン達は、そのまま通路を通りとなりの更に高めの塔へと入っていく。その際、道中の亡者よりもしっかりとした装備の騎士が現れ貪欲者に続き少々手こずりこととなる。

「——!!」

「こ、こいつ強いっ!?!」

「ロスリックの騎士だ。とはいえ、理性など無い。お前が倒せ」

「おいっ!?! そこはグランに手を貸してやってくれよ!!」

「そうしてやってもいいが、周りを見てみる」

「へっ!?!」

ただの亡者とは違うロスリック騎士の攻撃は、グランも危うく防戦一方となりかける。どこか無責任なアツシユにグランを助けるように言うビィだが、反対にアツシユに周りを見るように言われてみればいつの間にもやら亡者がまたも集まりだしていた。

「ちよちよ、ちよつとっ!?! また亡者が集まってきたわよ!?!」

貪欲者の塔のわきの階段から登ってきた亡者に向かってイオが氷の魔法を放つ。だが氷漬けになった亡者をよけて新たな亡者が現れた。

「やあん!!　まだくるっ!!」

「どこに居やがったんだよこいつらはよっ!」

「飛竜に焼かれ損ねたのもいたか……そら俺達で始末するぞ」

「わーつてるよ!!」

「ラカム、あんま弾使うな!!　ここじゃ補給できるかわかんねえからな!!」

「あいよっ!!」

銃の使用を控えるようにラカムに呼びかけるオイゲン。ラカムも乱戦で火器の使用はするつもりはなく、銃に装着された銃剣での戦いに切り替えた。

祭礼場で鍛冶屋アンドレイと話をしたオイゲンは、いち早くこの世界で自分達が使う「銃」の存在が無い事に気づいた。あるいは探せば存在するやもしれないが、だとしても弾の補給は難しいと判断。いつグランサイファーを発見できるか、そもそも元の世界に戻るのかわからないため必要な時以外は、格闘でなんとか切り抜ける事を決めた。

「だああっ!!」

「——!?!」

貪欲者との戦いから息つく暇なく始まった戦いであるが、アツシユやラカム達により亡者兵は片づけられ、最後にグランの攻撃により騎士がうめき声をあげ倒れた。

「はあ……はあ……た、ただの騎士じゃない。なんだこいつは……」

「普通の人間とは最早違う」

倒れたロスリック騎士を見て異様な雰囲気を感じたグラン。すると亡者兵を切り捨てたアツシユが近づき、倒れたロスリック騎士の兜をバスタードソードではたいてみれば……。

「うっ!？」

「装備ばかりは立派だが、中身はな」

剣ではたかれ僅かに開いた兜の隙間からは、他の亡者と変わらない生氣のない顔が見えた。

「騎士としての腕前、死を恐れぬ……いや、死を忘れた引く事のない攻撃。飛竜を逃れあの貪欲者に出会わなくとも、この場でどれほどの者が命を落としたのだろうか」

「……」

グランは自分達の周りにある血痕を見た。今亡者共を倒したものの以外に、いくつもの乾いた血痕がある。更によく見ればそれは、あのロスリック騎士が出てきた出入口から貪欲者の塔に「逃げるように」幾つも続いている。

「グラン、大丈夫ですか……?」

この場で逃げる事のかなわなかった何者か達、それを想像してしまい嫌な汗を流し険しい表情を浮かべたグラン。そんな彼に不安げなルリアが寄り添った。

「あ、ああ……うん。ごめんルリア。まだ大丈夫だから……」

「ククツ……無理する事もないだろう？」

すぐにルリアを安心させようとしたグランだが、彼の様子を見て笑うアツシュ。

「『まだ大丈夫』なんて言葉を出した奴がすぐ死ぬ。自信をもって『大丈夫だ』言えるならかまわんが、そんな疲れの色が濃い顔で言われてもな」

そんな人間を何人も見てきたのか、アツシュがグランの疲れを見抜く。

「……ええ、正直疲れました」

グランは誤魔化すつもりなど別に無く、ただルリアを心配させたくなかった。だから大丈夫だと言う言葉がまず出たが、アツシュに言われきまりが悪そうに疲れを認める。

高壁の始まりからまだ一時間と経っていない。だというのにグランは、どっと疲れを感じていた。心理的なストレスが激しく肉体に疲れを意識させたのだ。そんな彼をアツシュは笑う。

「まあ無理もないか……」

グランを責めるでもなく、アツシュはロスリック騎士の居た塔の上を見上げる。

「……疲れが死相に変わられても面倒だ。飛竜もおらぬこの塔の上なら休めよう」

「すみません……」

「ククク……ここじゃ誰もがそうだった。まして不死でも灰でもなければなおのこと、

気にする事もあるまい」

休めると聞いてグランだけでなく、他の面々も少し気が楽になるのを確かに感じた。皆がそうだったのだ。この慣れない世界の異様な雰囲気疲れにしまっている。

そんな彼らを早く休ませてやろうと思ったのか、アツシユはスタスタ塔へと向かう。そしてそのまま左手に向かい歩いていくが、後についていったグラン達には右手に上る階段があるのが見えた。

「アツシユさん、こっちじゃ——」

「G a a h……!?!」

階段を指さしたグランだが、アツシユのほうを向いてみれば同時に聞こえる亡者の断末魔。そして破壊され飛び散る木箱の木片、更には血飛沫。いつの間にかアツシユが塔内部の暗闇に潜んでいた亡者の背中を逆にとり、そのままバツクスタブを決めて塔の下へと蹴り落していたのだ。

「……」

「……ん？ ああ、そつちであつてるぞ」

「そうじゃねえよっ!!」

ギョツとしたグラン達は唾然としてアツシユを見ていたが、当の本人は何事もなかったかのように階段を指さしビィに怒鳴られた。

「ああビックリしたっ!? なんならさっきの貪欲者ぐらい驚いたぜっ!?」

「スタスタ実家のように入っていったと思ったら急に血生臭いの止めてえ!」

「今の今まで亡者共を屠ってきたらうに何をいまさら」

「緩急が激しいのよっ!! ……と言うか、緩がないのよっ!! 急々かつ!」

「クハハ……」

「何がおかしいのよ!?!」

休めると聞いて気が緩んでいたのもあり、かなり驚いてしまったビィとイオはプリプリ怒る。

一方でグランやカタリナらは、また別の事で驚くよりも訝しんでいた。

「……カタリナさん」

「うむ……」

——アツシユは何時あの亡者に気が付いていたのだろうか?

そんな疑問が彼等によぎる。

塔出入口の左手、今はアツシユが破壊してしまったが木箱や樽などで視界が遮られており、階段へ続く右手よりもかなり薄暗い。その方向へ間違はなく彼は、迷いもなく進み即座に亡者を倒した。

彼は手際が良すぎる。だがそれについてグランは、アツシユに聞こうとは思わなかつ

た。話をはぐらかされるのが落ちだとわかっているし、今はまだ変に疑うような事はない方が良いだろうと考えたのだ。

「どうした、休みたかろう?」

今度こそスタスタと階段を上るアッシュ。悪党ではないだろうが、この素顔さえわからない面妖な男を果たしてどれほど信用してよいのだろうか。だがそれは向こうも同じように思っているとグランはわかっている。まだ互いに完全な信頼を得るなど出来るはずもない。

しかしいつかは得ねばならない。グラン達もアッシュも、互いに信頼を持たねばならないのだ。

■ V 篝火「高壁の塔」

塔の階段を上ったグラン達は、すぐに敵の気配の無い場所へと出た。そこは最初に高壁に來た場所に似た広場であり、そしてその中央には――。

「また篝火……」

やはりあの「篝火」がグラン達を待っていたかのように燦り弱々しい火を揺らめかせていた。

「休めるって聞いてそんな気はしたけど」

「これがあればまず休める。覚えとくんだな」

「……まずって言い方が気になるんですが」

「まあ何事にも例外はあるものだ」

グランの問いに不穏な答えを返したアツシユは、ここでも篝火を灯そうと手を伸ばす。が、何を思ったかその手を引つ込めグランを見る。

「……え？ な、なにか？」

「お前、これを点けれるか？」

興味深そうにアツシユは尋ねた。そして尋ねられたグランは、アツシユと燻る篝火を交互に見る。

「……わかりません」

「ならやってみろ」

ほぼ命令も同然の言い方でアツシユは篝火を指さした。

やってみろと言うが、別に何か道具を使って火を起こせと言うわけではない。これまでアツシユがやったようにやれ、と言うことだろう。

グランは恐る恐る祭祀場や高壁最初の篝火のように手をかざしてみる。燻る火から僅かな温もりを感じる。だがそれとほぼ同時に「ポワツ!!」と弱々しく揺らめいて

いた火が燃えあがる。

「っ!？」

燃え上がる火を見て思わずグランは手を引つ込めた。

「だ、大丈夫かグランツ!？」

「うん……大丈夫。けど、点いちやったな」

「はわ……アツシユさんと同じように点いちやいました……」

魔法を使ったわけでもなく、手をかざしただけで篝火が灯る。なにか特別意識したわけでもないというのに、それが出来てしまいグランは戸惑った。

「そうか、点いたか……」

だがそんなグランと彼が灯した篝火を見たアツシユは、「うむうむ……」と何か思案し
唸る。

「クツクツク……やはり霊体とも違ったか。なるほどな……」

「何か興味を惹かれたのかしら？」

「そうだな……興味深いな、実に興味深い。ククク……」

勝手に一人納得し面白そうに笑うアツシユ。ロゼッタにの問いにも殆ど笑い声で返し、そのまま篝火の前に座り込みだす。

「こんな場所だが少し休むがいい。亡者もここには来ないだろう」

そう言つてアツシユは、篝火に向かいまた何かを思案し始め黙つてしまった。グラン達は顔を見合させた。

「休め、ねえ……」

「そりや変なのがないのは嬉しいけど……」

ラカムとイオがあたりを見渡す。瓦礫やなにかの残骸、更には木と一体化したような亡者のようなナニか。そんなものが当たりに散らばり、気が休まる雰囲気ではなかつた。

「とは言え休める内に休まないとな。ルリア、ビイ君、こつちの階段なら座りやすい」

「うん、ありがとうカタリナ」

「ふへえ……ドツと疲れたぜオイラ……」

「ラカム、ここなら見晴らしがいい。少し見とくぞ」

「あいよ、運よくグランサイファーでもみつきりやいいがな」

篝火そばの崩れた階段。そこに座り一息をつくルリア達。オイゲンやラカムは、塔の上という事もあり、見える範囲でロスリックを見渡し建物や地形を調べていた。

グランはただぼうつと自分が点けたらしい篝火の火を見ていた。そしてなんとなくだが、アツシユのように篝火のそばに座り込む。果たして何時誰が刺したのか、篝火に突き刺さるあの螺旋の剣、それに沿うようにして炎は燃え上がる。だがそれは、温かく

グランを癒すかのようにであった。

(ロスリック、こんな場所が……どれ程あるのだろうか)

ここでの旅は、まだまだ続くだろう。アツシユに聞かずとも、グランには予感があった。火の心地よい温もりがそれを教えてくれたのだ。これからも、幾度も、この温もりを感じるだろうと言ふ予感を、火がグランに教えたのである。

しかしてそれは、真実であろう――。